

# ぶどうの木

第 37 号 (2012 年 4 月発行)

## 「ぶどうの木」 第三七号 目次

巻頭言	身辺点描	主の御業を崇めて — 退院の手紙から —	わしがなるとは、こりやたまらん	夫の召天	わたしの歩み	八幡前田教会に導かれて (前編)	前田教会と戸畑教会との思い出	命のおことば	前倒し	信仰雑感 (四)	信仰雑感 (五)	ロシア旅行記	詩「あしあと」より	— 追録 — 全か無か	編集後記
-----	------	----------------------	-----------------	------	--------	------------------	----------------	--------	-----	----------	----------	--------	-----------	-------------	------

榎本和義 牧師	長田正幸	上田武士	正野宏	野口米子	久保田忍	松原宏篤	権藤節美	伊規須太	幻視人	首藤正	首藤正	正野真	金生栄	伊規須太	65
---------	------	------	-----	------	------	------	------	------	-----	-----	-----	-----	-----	------	----

八幡前田教会  
基督伝道隊  
福岡大濠公園教会  
戸畑教会

## 巻頭言

榎本和義牧師

「主は言われる、『あなたがたはわが証人、わたしが選んだわがしもべである。』」（イザヤ書四三・十）

最近インターネットを通して買い物や観光地の名所旧跡、宿泊予約などいろんな目的に利用されています。自宅に居ながら、文字通り世界各地の名物名産を手に入れることができますから、こんな便利なものはありません。しかし、良いことばかりではありません。買い物の場合、現物を自分の目で確かめることができないから、送られてきた物を見て、失望したり、騙される場合もあります。そのようなトラブルを避けるために、実際に利用した人からの感想を聞くのが最善の方法です。いわゆる「口コミ」と言われる評判です。もともと、口コミも「やらせ」があるため信用できないようですが、それ以外に確かめる方法がないゆえ、口コミ、評判に頼ります。まさにこれが証言と言うべきものです。

私たちも神様を直接体験して、その恵み、ご愛、力、知恵

など、証言者となるように期待されています。主の弟子たちは、イエス様とこの世にあって生活を共にしました。しかし、それだけではイエス様を活ける神の子、キリストと信じることができませんでした。やがて、聖霊が彼らに注がれ、魂の目が開かれたとき、主と共に過ごした日々が新しい意味を帯びて、彼らの胸に刻まれ、イエス様はキリスト、救い主であると大胆に告白したのです。聖霊に満たされた弟子たちはユダヤ人の指導者、宗教家を前にして、「この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」（使徒行伝四・十二）と語っています。彼らは自ら実験体得したところに従っていますから、彼らの言葉ほど確かなものはありません。

教会誌「ぶどうの木」37号もこのような証言が集められたものです。寄稿された方々、それぞれに主が御霊を与えて、神様との交わりに導き、様々な現実の出来事を通して神様の深みまで味わい、「こうなったのは、主の恵みと憐みであった」と語らせているのです。彼らの証言を通して、一人でも多くの方が同じ体験に導かれるようにと願います。さらに進んで、次回にはあなたも「証人」となってください。

ささやかな冊子にすぎませんが、五つのパンと二匹の魚で

五千人以上の人々を満腹させた主の祝福を信じて、御手に捧げます。また、読まれる方々が主の恵みに満ちあふれるようにと祈ります。寄稿してくださった方々、制作の労をとって下さった方々、ありがとうございました。



## 身辺点描

長 田 正 幸 (前田)

一、変わったか、変わらなかったか

大濠公園キリスト教会において、三年前の平成二十年八月下旬に受洗した。まもなく新たな誕生日、三歳である。この間、変わったか、変わらなかったか。

「キリスト教徒は外見上、普通の人間と少しも変わらない。人ごみの中で、この人はキリスト教徒、この人はキリスト教徒ではない、とは区別がつかない。しかし、主を信ずるか否かによって、その人の思いや態度・行動は違っているはずだ」  
いつだったか、榎本和義先生が言われたように記憶する。  
私を受洗したことを、友人や先輩は驚きの眼で眺める。そして、何が動機かと質問する。

「聖書にあることを信じたのです」と、ある人に答えた。

「七〇(歳)にもなつて、どうしてだ？」

「七〇になつて、一区切りとしたかった」と別の人に答えたが、言葉足らずだったと思う。

「七〇歳となり、あの世が近くなった。これまで悔いることがあったので、罪・とがを許していただき、魂を清めた

上で、あの世に行きたいのです」と言えばよかった。私はうまく言えないことが多い。

しばらくすると少しも変わってないではないか、と言う者もいた。他人が何を言おうと勝手である。私はキリストを信ずることにより、以前とは変わったと思っている。(注…後述の通り、神様が変わえられたのである)

しかしながら、クリスチャンなら、それにふさわしい思いや考え、態度をとるはずのところを、よく考えもしないで、いや、神様にお伺いもしないで、他人の言うことにふりまわされたり、ついクリスチャンにあるまじきことを言ったりすることが往々にしてある。心しなければならぬ。

―追加挿入二〇一一・八・七―礼拝式・榎本牧師ご説教

「人が自分の考えで変わることはできない。神様が変わえられるのである」

―二〇一一・七・二二 日々の聖言―。「モーセは彼らに言った、『しばらく待て。主があなたがたについて、どう仰せになるかを聞こう。』」(民数記九・八)

―私たちは案外とせっかちで、すぐやろうとします。そこには、神様の御心を伺う暇すらありません。そのために失敗するのです。神様の祝福にあずかるには、御旨を知り、従う

ことです。それにはまず神様に聞かねばなりません。必要なのは「しばらく待て」です。そして聞くのです。その後、聞いたところに従い、動き始めます。すると神様はその業を祝福してくださいます。(KE) 二〇二一年七月三日 記

## 二、うた

以前、家のなかで歌うのは、

―清水ウ港のオ、名物はア……

―影か柳か勘太郎さんかア……であった。声を張上げていた。

近ごろは、

―いつくしみ深き、友なるイエスはア……である。

その変わりように、家内はひどく笑う。

「やくざのうたから讚美歌へ。何たることか。」

他人が何と言おうと勝手である。

「喜びをもって主に仕えよ。」

歌いつつ、そのみ前にきたれ。」(詩篇一〇〇・二)

二〇二一年七月三日 記

## 三、陸上競技部クラブ活動指導

(一) 二年前から中学の陸上部(中長距離)の指導を引き受

けている。

企業の陸上競技部OBで、NPO法人〓北実会を結成し、中学・高校・一般市民ランナーの指導に当たっており、その一環として、福教大附属小倉中学を私は担当している。

その指導をはじめて間もない頃のこと。九月の土曜日(授業休)で朝九時過ぎから練習開始、男子八メートル、女子六千メートルの持久走の予定であった。まだ暑い日差しであった。

自宅から学校まで、車で一時間かかる。到着したら、一年のかわいい女生徒が、にこにこして近づいてきた。「今日は山道(小文字山)の練習に変えていただけませんか。」よく聞くと前年までの顧問の先生がそのような練習をさせていたという。私が指導に当たるまでプランクがあつて、キャプテン主導でよくやっていたとのこと。当方の目の届かないところで、大丈夫かと思つたが、男女十名程度の集団なので、OKを出した。女生徒は、「やったア」と言つて、脱兎のごとく、成り行き如何と待っている集団のほうへ走つていった。

キャプテンも策士である。一年の女の子を使いに出したのである。おかげでこちらは手持ち無沙汰となった。彼らが帰つてくるまで小一時間待たなければならぬ。

手ごろな箱に座っていたら、近くで女生徒二人が砲丸を後

ろ向きに抛り投げていた。キヤアキヤア言いながらである。多少無然とした気持ちもあって、「こらッ。まじめに練習しないと怪我するぞ」と言葉を荒げた。「砲丸の練習は指導受けたことはないのか」女の子は一瞬きよんとした表情であった。小さい声で「ありません」と言った。

やがて山道練習が終わった連中が帰ってきた。終了の挨拶を終えて車に乗り、帰ろうとしてふと見ると、注意した生徒の一人が泣いていた。その肩をもう一人が抱いていた。

おや！と思いつながらそのまま帰路についた。

途中で気にかかつて、店舗の駐車場において車中で祈った。「天の愛するお父さま、感謝してお祈りいたします。主イエス・キリストの父なる神に栄光がありますように。どうぞ私に御霊をお遣わしてください。その働きによって私をお導きください。」その日、女生徒を叱りつけたことを述べ祈った。ご返答いただいたかどうかよくわからなかった。しかし、学校へ戻り詫びた方がよいと言われたような気がした。

また引き返したが、もう一時間以上経過していて、生徒たちは帰った後であった。先生方に事情を申し上げようとしたが、授業休で二人ともお休みであった。

二日後の月曜日の放課後、待ち受けていたが、一向に生徒は現れない。先生に経緯を話した。「実は、二年生は新型イン

フルエンザが蔓延して、一週間の休みとなりました。事情はわかりました。そこまで気を遣わなくていいですよ。私からも今度言っておきます。」

どうも気が収まらないので、便箋に「突然、関係ない立場の私が叱りつけてしまいました。申しわけありません」と簡単に書き、氏名はわかったが住所がわからないので、先生に書いていただいたうえでご送付をお願いした。

週が明け、登校日の放課後、本人たちに会って詫びた。二人ともにここにこして、「私が悪かったのです」と一人が返答してくれた。私は救われたような気がした。

(その半月後だったか、短距離指導者を通じ、砲丸投げの指導者を招いて練習を見てもらった) (二〇一一年七月二五日 記)

(二) 中学生を見ていると、特に身長差が著しいことに気がつく。一年生はまだ小学生の雰囲気を漂わせ、制服も何かそぐわないところがある。しゃべりかたもピーチクパーチクだ。ひよこを思わせる。

二、三年生になると急激に背が伸びることが多い。ある男生徒は年十八センチ伸びたという。青年・大人という風貌。

私は、当分の間、一年と二、三年の二通りの練習スケジ

ユーロを作ることにし、一カ月分を渡している。一年（ひよこ・黄色の口ばし）、二年（青年）のイメージから、前者は黄色の付箋を、後者は青の付箋と区別した。どうです！この論理的思考。我ながら感心しますネ。

先ごろの五月下旬のことである。中学で中間試験があった。ここでは試験前十日間は、クラブ活動休止となっている。試験が午前中で終わり、さて練習を始める段になって気づいた。隣接の小学校は午後も授業があり、校庭が使えない。放課後の練習は、事前に許可をもらっていて、両校併せた敷地を最大限使い、七〇〇メートルのコースを設定している。中学校は短距離や、野球・サッカーも使っているの、混雑し使いづらいところがある。

当日は、急ぎよ中学校庭だけのコース設定となった。掲揚台、楠の外側、野球バックネット裏、走り高跳びのマットの側を通る、と設定させた。測らせると三六五メートルという。

当日の練習は、二、三年生は、男子八千メートル持久走、女子六千メートル持久走、一年男女四千メートル持久走である。

私が紙に、 $8000 \div 365$ と書き、「えーと、2がたつな……」と計算はじめたら、小学生のような一年生が覗き

込んで、「二二周です。三三五メートル余ります」と言う。

もし私が電卓をもって計算しても、彼より速く計算できたかどうか。

「ほう！。六千メートルは？」

「一六周と一六〇メートル」

「じゃあ、四千メートルは？」

「一〇周と三五〇メートル」

「きみはよい頭を、神さまからもらっているな。」

「？……」

「将来は科学者か？医者か？」

「医者になりたいです」

「（今回の）試験はできたか。」

「まあ、まあです」（笑）

北実会（NPO法人）の一人が臨時に来ていて、そばで一部始終を見ていた。そして「はははは。すごいネ」と笑った。生徒に感心したのである。

天の愛するお父さま、生徒に更なるお恵みを。

（二〇一一年七月二六日 記）

#### 四、甥

金生一郎先生が七月の礼拝式でのご説教で、「今年ももう

半分（月日が）過ぎました。私の身の回りでも種々のことがありました。何といっても三月に起こった東日本大震災は大変な災害であり、私（たち）にも大きな影響を与えています」と述べられ、お話を展開された。

震災から一カ月過ぎの四月一二日、甥が訪ねてきた。

初めての北九州来訪である。彼は私の三歳下の弟の息子敦史。東京生まれで、そこで育った。長距離トラックの運転手。

二十年の経験がある。

どうして来ようとしたのか不明である。彼の父は「何で（行くのか）？」と言ったという。関東地区には、小生の兄弟、甥、姪たちが家庭を持っている。彼の同年代のいところに言うど、やはり「何で？」と口々に言ったという。

私の倅は小山駅（栃木）の工事事務所にいる。敦史が電話すると倅も「何で？」と言ひ、「伝言は？」と聞いたら「小遣いくれ、と言つといてくれ」と言ったとか。（全くもう……）。

倅はいつもそんな物言いをする。こちらが電話で、

「元気にしているか？」と問うと、「元気」

「食事はちゃんと摂っているか？」「ちゃんと摂っている」とオウム返しである。

手紙出してもなしのつぶて。家内が物を送っても、届いたとの返事やがき一本もよこさぬ。

初めて向こうから電話が来た。

「いまさつき、すごい地震があった。床にたたきつけられたよ。けがも何もなかったから、心配しないで」だった。

敦史の来訪目的は不明であるが、関東長田いとこ会を主宰、バス旅行をしたのでその報告をしたかったらしい。DVDですでに知っていたのであるが……。

丸一日いて、まくし立てるように話して帰って行った。

（一）敦史の話（その一）

東日本大震災で、自衛隊が被災地に物資を運んでいた。やがて民間の会社が運ぶことができるようになり、彼は会社のトップバッターとして、手を挙げたという。三月下旬か。

途中、難儀して夕方仙台に到着、知人がスーパーの店長をしているので面会した。

「トラックは今晚、ここの駐車場に置いていたほうがよいぞ。路上に駐車したらガソリンを抜き取られるおそれがある。」と言われた。

翌日被災地に物資を降ろしたが、テレビで見ると大違い。あのがれきと変な強烈な臭いはたまらなかったという。

新潟の震災のときも一番乗りだった、と自慢した。



(二) 敦史の話(その二)

話は別だが、彼の結婚式のとくにこんなことがあった。彼(彼の家族も)はクリスマスチャンでないが、早稲田大の近くの教会で式を挙げた。新婦が入場する前、私のすぐ後ろで、ひそひそと話している。当方は難聴なのだが、そのときはよく聞こえた。新婦の友人か、教会の信者か。若い女の子。「正幸さん、可哀そう。名前付けるのが面倒だったのね」。くすくす笑っていた。隣の三兄がひじで小生をつついた。

出席者リストに、伯父長田保、伯父正和、伯父正俊、伯父正幸」と姓名が記されていたのだ。新郎の父は末弟で紀之である。

「おじさん」と敦史は話の枕にいう。何か変な感じ。

「おじさんの兄弟(姉妹)七人は、血液型オールB型ですネ。おじさんの両親もB型です」

「へえ！知らなかった。どこで調べた？」

彼は笑って答えなかった。

「みんな個性があるね」

● 長男Ⅱ農業と農機具販売。暴力団まがいの男が農機具の代金高額を久しく滞納していたので、訴訟問題にして取り返した、と威張っていた。生活習慣病の管理患

者。八三才。

● 長女Ⅱ元教員(教員に嫁いだ)。長男と一歳ちがい。昨年、脳出血で倒れ、一時意識不明であったが、数日で覚醒し、その後二、三の病院でのリハビリによって、半年程度で自宅へ帰った。かつて書道県展で優秀賞をもらったとか。そのほうの世話役で、関係者を車で送り届け、自宅に戻り倒れた。

● 次男Ⅱ牧師をしていたが、体をこわした。回復しても牧師に戻らなかった。体力づくりを兼ねて新聞配達をした。経緯はわからないが、大新聞社の社員になった。配達業務では一人だけだと言った。それで家族を養った。長男が牧師。

● 三男Ⅱ自動車部品会社の社員・労働組合の役員を兼ねていて、会社からにらまれていた一面がある。終業時刻になると忙しくても仕事やめて帰る。有給休暇はいつもゼロになるまで取得する。いま後期高齢者となったが、生まれてこのかた、入院経験のないのが自慢。妙な記録。

● 四男Ⅱマラソンランナー。男で乳がん。妙な記録。  
● 五男Ⅱ小さな旅行会社(不動産業務も兼業)で働いていたが、創業の経営者に取り入り社長に。会社はジャ

ンボトラベルと名前は大きい。が、今は会社を閉じるのに四苦八苦。そのため心筋梗塞で、危うくあの世へいくところだった。敦史の父。

● 次女IIプラスティックの会社にいた。現六八歳。夫は六十歳定年退職後、住宅金融公庫の残金を退職金で支払った途端に、あの世に召された。この妹の上に六人の実兄・実姉がいて、すべて曲がりなりにも、この世に存在する。これも神様のなされるわざであって、お恵みを感謝する。

敦史はいろいろと言いたいことを言うために九州くだりまで来たのか。彼は小さい頃、賢姉愚弟といわれ傷ついた。それを具体的に話し、劣等感をずっと持っていたと言った。そんなことも言いたかったのか。彼の姉は薬剤師で大学病院に勤めていたことがある。

ほかに、ああだこうだ、と関東方面にいる我々の兄弟やいとこのことなどと、一方的に話して帰って行った。

「これらはすべて神さまがなされたことである。それは人間一人ひとりに十分な配慮のうえなされたことである」と、「日々の聖言」にあったような気がする。

敦史来訪後、しばらくたって「九州男児は言葉が荒いのだ」

「B型は思考が短絡的である」と言って、大臣の職を棒にふるた方がおられましたねえ。

両方あてはまる我々を同類項として、言い訳してもらいたくないネ！ ○○○○○○……（この箇所削除）

いや、わが身を振り返るとよくあてはまっていると、納得すべきか？

前述の文は、数日前に作成済みであった。しかし、どうも気にかかる。―そうだ、思い出した。

礼拝式だったか、木曜会だったか、「他人を評価する、批判する、非難する、さばく。これは自分を高くおいて他人を見下す、傲慢な姿勢である。さばくことは主がなさることであり、われわれは主にすべてを委ねることである」

このようなお話だったような気がする。これに照合すると、「断じて許せない」は間違いである。その箇所は削除する。

「人をさばくな。自分がさばかれないためである。」

（マタイによる福音書七・一）

―タイミングよく、二〇一一・八・二 日々の聖言―

「愛する者たちよ。自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。」（ローマ人への手紙一二・一九）

現代はストレスの多い時代です。いつもイライラ、トゲト

ゲはりねずみのようになっていきます。その原因の大半は様々  
な不当と思われる事態や言葉に腹立てているからです。怒る  
とき、人はすでに裁いています。自分が検事であり、裁判官  
になっているのです。主の十字架のあがないを信じた時、裁  
判権を神様に返還したはずで、裁くことを神様に委ねると、  
これほど気楽なことはありません。神様は良し悪し共に必ず  
報いなさいませ。(KE)

(二〇一一年八月二日 記)

## 五、兄

甥が帰った後、五日目に今度はすぐ上の三兄が来訪した。  
埼玉在住である。前者が台風一号なら、二号の襲来である。  
まもなく七六歳になるのだが、郷里島原での中学の同期会  
(喜寿の祝いを自分たちで実施)に出て、その帰りに寄った。  
入院経験ゼロの男。一以下、同期会の話。

集まったのは四十人弱。主な人物。

A 市議会議長を先日までつとめた。漁業組合関連のボス。

B 元高校教師。Aのいとこ。

C 元航空自衛隊員。小生の小六年次の担任の息子。

D 元大銀行の支店長。長崎の造船所に中学から就職した

が、高校卒の資格を得て進学し、東京外国語大卒。

雲仙のホテルで盛会であった。右の四人は酒豪ぞろいで二  
次会で隣の市に行つて、また飲んだ。兄も酒豪の部類である  
が、一次の宴会で飲みすぎダウンして行かなかつた。Cの弟  
とBの妹は結婚している。Cの妹は同級生の誰かに嫁いだ。  
「したがって、おれの同級生は辛蔓的に親戚としてつながつ  
ているのだ。下手に悪口でも言つたら総スカンを食う。」(前  
述のように、九州男で血液型B型の兄にしては、思慮のあ  
るふるまいをしたようだ)

やはり同級生でKといった。彼は短距離を走らせたなら近  
隣の中学ではかなうものがいなかった。野球の捕手であつ  
た。それがいまでは寝たきりで介護をうけている。やせ細  
つて、見るも無残な状態で、可哀相でならなかつた。

(それもこれもすべて「神様がなされたことである」と  
私は思い、神様のあわれみ、お恵みがなされますよう祈つ  
た)

兄は退職後、青少年スポーツの役員をつとめ、卓球の団  
長で全国大会に出場した経験をもつ。また知的障害者にと  
もに軽作業を多年にわたつて行なつた。また、家族に対  
して一生懸命に努力した。自分の連れ合いの病気に際して

もできる限りの看護・援助をした。子供二人にも物心両面で援助している―このようなことを長々と話した。すべて善いことばかりの行いと言わんばかり。

他に末弟の会社の話―（兄は顧問として金の工面など協力しているらしい） 妹の話―など。

そして―。「お前も、正和（次兄）もクリスチャンだが、生真面目過ぎて、人間としての幅が狭いよ。面白くない。酒ぐらいい飲んで、おおらかに生きなければだめだ。清濁併せ飲むくらいの度量がないと…。組織の人間としても非常にマイナスだったと思う」。

（おおきなお世話だ。兄が何と言おうと勝手であるが）

（「神様が」計画されていて、呼んでくださった―榎本先生が受洗直前におっしゃったこと―を言おうとしたが言えなかった。兄には言わなかったが、先生のお言葉は、この歳になつた私に、最も善いものを与えていただいたのだと受け止めており、感謝している）

翌日、割安の航空券を手配していたと言って、兄は帰って行った。

（敦史と同じように、台風一過の趣があった）

（二〇一二年八月九日 記）

## 主の御業を崇めて

― 退院の手紙から ―

上 田 武 士（前田）

「主よ、あなたはみわざをもつて

わたしを 楽しませられました。

わたしはあなたのみ手のわざを喜び歌います。」

（詩篇九二・四）

主の御名を崇め、感謝いたします。暑さ厳しい毎日ですが、皆様、お元気でお過ごしでしょうか。

この度の入院に関しましては、皆さまの篤い祈りに支えられ、心から感謝申し上げます。主はその篤い祈りに応えて下さって、六月二五日、無事退院させて頂きました。

この度の入院を通して、主は御自身の御業をはつきりと心に植え付けて下さいました。まず、今年の年頭からは、足の痛みがあり、薬にて治療していましたが、だんだん痛みは強くなるばかりでした。レントゲンでは分からなかったのですが、CTスキャンにて輪切りの状態で検査しました結果、膝の内側の骨が壊死していました。主は手術の道を示されましたが、それに至るまでに次々とハードルを置かれました。ま

ず、糖尿病の治療に三十日、更正医療申請の手続きに三十日を要しました。この間、とても辛かったです。いよいよ五月の連休を避け、五月六日入院の運びとなりました。これらは、私たちがしつかりと主に祈り、主に頼ることを教えられるための月日でした。「すべてのおかげには時がある」(伝道の書二、一)この事を深く教えられました。

人工関節置換手術をするためには、以前骨折の手術をした時に挿入した五本の釘が邪魔だということでした。そして、医師が心配していたことは、以前の中国での手術の際の釘が抜けるかということでした。果たして材質は、型は、寸法は？レントゲンでははっきり分かりません。

ところが、主は手術の前日、中国からの研修生を病院に送り込まれました。この研修生の仲介により、以前に手術をされた中国の医師にコンタクトが取れました。十年以上前の医師が浙江省寧波(にんぼう)大学付属第三病院に、現在も従事されていました。この事も驚きです。釘の規格が、日本と中国とは全然違う事が分かりました。手術当日、手術室の現場に医療工具のエキスパートに来てもらったそうです。案の定、医療工具では釘が抜けなくて、工業用工具にて釘を無事抜く事が出来たそうです。

手術室から出てきた時は五時間が経っていました。このよ

うな出来事は、神様の御業のほか何ものもありません。主の御業に襟を正すのみです。もし、この事がなかったら、手術はできなかつたのです。まことに主の御業を賛美し、感謝申し上げます。

現在の状況は、膝の内側の骨の壊死の箇所を切除して人工膝関節に置き換えました。それで、過去の痛みは完全になくなりしました。切開した部分の痛みと熱がしばらくは続くようですが、時間が薬のようです。今後は、体内での細菌感染と新たな骨折に細心の注意が必要です。リハビリにより、筋肉を強める事も必要です。

皆さまの祈りに、神様はここまで驚くべき御業をもって癒し、強めて下さいました。これからも一つひとつ祈りながら、主のお導きにお従いしたく祈念しています。今後とも、また祈りのうちに覚えて頂き、よろしくご指導、ご鞭撻のほどをお願い申し上げます。

先生始め兄弟姉妹皆様方の篤いお祈りに、また、顔も知らないネット上でのお友達の篤い祈りに、感謝のご挨拶を申し上げます。有難うございました。皆さまとご家族様の上に、主の豊かな祝福をお祈り申し上げます。

「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。  
驚いてはならない、わたしはあなたの神である。」

わたしはあなたを強くし、あなたを助け、  
わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる。」

(イザヤ書 四一・十)

平成二三年七月

わしがなるとは、こりやたまらん

正 野 眞 宏 (前田)

変な題をつけたものである。しかし、私にとっては、ある意味でこれからの人生へのターニングポイントともなる出来事だったので、ここに記すものである。

それは、平成二三年七月二三日、土曜日の事である。その日は、いつもの通り教会へ掃除に行き、いつもの通り会堂に掃除機をかけていた。机の下などは結構腰を使うので、気をつけていたつもりであるが、終り頃になって、腰に違和感を覚え、無意識に手が行くようになった。ぎっくり腰のように、急に痛みが走ったわけではない。だから、いつ悪くしたのかも分からない。何となく気になるといった程度であり、その

うち治るだろう、今までもあった事だから、と思っていた。

ところが、帰ってから、右足付け根の外側部分が、歩くとき痛み出した。腰をかがめて歩くと(いわゆる爺さん歩行)、痛みは消える。横になったり、腰掛けると何でもない。痛みはそんなにひどいものではないので、そのうち和らぐだろうと思っていたが、次の日も状態は変わらなかった。

それで、一度病院で診てもらい、原因をはっきりさせた方がよいと思って、月曜日に近くの整形外科に行ってみた。そこでレントゲンを撮ってもらおうと、神経が通っている腰の骨(脊柱管)が狭くなり、神経を圧迫していることが判明し、「腰部脊柱管狭窄症」という立派な病名がついた。これは激しいスポーツをしたり、腰を使う職業の人になることが多いが、あなたの場合は老化に伴うものです、という。これを聞いた時に、一番に私の頭をよぎったのが、太田蜀山人の「今までは人の事と思いに、わしが死ぬとは、こりやたまらん」という狂歌をもじって、「今までは人の事と思いに、わしがなるとは、こりやたまらん」という思いだった。(それで、これを題にした次第である。)

これまで神様の憐れみで病気らしい病気もせず、快食、快眠、快便、加えて信仰による快心が与えられ、毎日を元気に過ごし、週二回二時間の卓球もそう疲れることもなく、時々

しかししない庭仕事もそれなりにこなしていた。私はこのまま  
で死ぬことはないのではないか、そこまでは考えないにして  
も、しばらくはこの状態が続くのだろうと、勝手に思ってい  
た。そういう時に、降って湧いたようなこの事態である。何  
か原因があつてなつたのなら、完治することがあるだろう。  
しかし、老化によるものだと聞かされると、悪化することは  
あつても、もはや治ることはないということであり、あなた  
もいよいよ老人の仲間入りだねと宣告を受けたようであつた。  
頭の中では、年齢的にも体力的にも若くはないと意識しつ  
つも、心のどこかでこれに抵抗しようとする思いがあつたの  
だろう。それが崩されて、いささかの戸惑いを覚えたのであ  
る。

人間、ちよつと悪い事が起ると、もつと悪くなるのではな  
いかと心配するものである。伊規須先生が同じ病気で車いす  
生活となつた事を聞くと、私もこれが元で歩けなくなり、筋  
力低下で体のバランスを失い、様々な病氣になつて、寝たき  
りや認知症になるかもしれない……。そんな事を考えたりす  
る。老化による病氣や機能低下の入り口に無理やり立たされ  
て、これを機会に坂道を転がるように、次々と不自由な生活  
を余儀なくされるのかもしれない。いよいよその番がわしに  
回つてきたのか、あと何年生かされるかわからないけど、その

覚悟をしなくてはなるまい、そんな思いだつた。

しかし一方では、主の許しがなければ何事も起らない。  
この事も、主が許して出たことである。そうであるならば、  
受けて行かねばならない。「人が若い時にくびきを負うことは、  
良いことである。主がこれを負わせられるとき、ひとりすわ  
つて黙しているがよい」(哀歌三・二七〜二八)とあるように、  
主がこの事を求められるのであれば従うべきだ、という思い  
と云うか、御声を聞くのである。

また、ヨブの信仰を思つた。ヨブは、私とは比較にならな  
い試練を受けた。財産や家族を失つたばかりでなく、自らは  
厄介な皮膚病に罹り、昼となく夜となくかゆみに悩まされた。  
しかし、彼がこれを癒してほしいと祈つた記述はない。病の  
癒しよりも、主の御声を聞くことを求めたのである。

私は病院を出る時には、心の整理はついていた。これから  
どうなるかわからないけれども、一切は主の手に委ねて行こう。  
もし寝たきりになるなら、なつたらよい。この痛みを早く取  
り去つていただきたいけれども、それを一番に求めることは  
やめよう。癒されることが主ではなく、ここで主の御声に耳  
を傾け、主の御心に従うことが大事である。そう心に決めた  
のである。私がそう慌てることもなく、こういう信仰が与え  
られたのも、日々聖書を読ませていただき、主の命に導かれ

ていたからではないかと思った。

ここまでは、今回の出来事の第一ラウンドである。

治療としては対症療法しかなく、コルセットをして腰を保護し、湿布薬を貼り、症状を軽くするための鎮痛剤を飲むだけである。こうすることで症状が治まることがあるという。もし痛みが引かなければ、神経ブロック注射をする。それでも駄目なら、手術で神経の圧迫を取り除く方法があるのとこのことである。

願わくは、そうならないようにと思うが、全ては主の手の内だからと委ね、指示された治療法を実践することにする。私の場合は、典型的な腰部脊椎管狭窄症の症状で、腰をまっすぐに伸ばして立つと神経を圧迫して足に痛みが走り、前かがみになると和らぐといった風である。それゆえ、運転には差し障りはなく、生活上の支障はあまりないが、やはり重い物を持つたりはできないし、長年シヤンと立って歩く習慣となっているのです、薬を飲んでいても度々痛みに襲われ、それとの戦いであった。

薬を飲み始めて五日目の土曜日、ふと痛みのない事に気づいた。普通どおり歩いても痛みがない。神様がここまで癒してくださったと感謝し、月曜日に先の整形外科医にその旨を

伝えると、「こんなに早く効くとは思わなかった。もう大丈夫でしょうが、念のためにまた痛んだ時のために薬を出しておきましょう。腰に負担をかけないように気をつけてください。スポーツは血流を良くするのでやった方が良いでしょう」ということで、一週間で医者から無罪放免となった。

私は喜び勇んで病院を出た。完治しているわけではないが、こんなに早く、ここまで強められた事に、心から感謝した。これが、第二ラウンドである。

続いて、第三ラウンドとなる。

その日の夕方、どれくらい軽減されたかを知る意味もあつて、家内と三十分の予定で散歩に出た。ところが、十分もしない内に足の付け根が痛み出し、最後は足を引きずるようにして帰って来た。やはり無理だったのだろうか。私としては、次の段階として、卓球をする予定であったが、当分お預けとなった。

散歩の痛みは長くは続かず、次の日には、以前と同じ状態となったので安堵した。ところが、それで調子に乗ったのか、玄関先の梅の木の枝が伸びて気になったので、剪定バサミで枝を切り始めたのである。勿論、腰に気をつけての事であったが、上の部分で腰を伸ばさなければならぬ個所で、危な



いとは思ったが、もう少しで終わるからと、思い切り腕を伸ばし、右足に体重を掛けた時、腰に痛みが走った。しまったと思っただが、後の祭りである。

症状が、完全に元に戻ってしまった。否、以前は痛まなかつた腰まで痛くなつたので、悪くなつた。再び薬を飲むようになったが、なかなか痛みが引かない。爺さん歩行である。

私は思った。少し状態が良いと、自己判断で行動してしまう。そういうやり方を長年やってきているので、自己判断でやれると思うと、祈らないままやってしまうのである。この時も、そうである。上部剪定していた時、主はそこで止めときなさいと声をかけてくださったと思うのだが、私はもう少しだからとその声を無視してしまった。

この事は、この時だけの事ではない事に気づいた。これから老化が進み、できない事が多くなる。庭木の剪定で高い所に上ることや、自動車運転もいずれできない時が来る。自分はまだ若い、まだできると思っていると、大失敗をする事になる。一つひとつ、主に祈って導きに従わなければならない。人間は痛い目に遭わないと、なかなか改めることをしないが、主は私に老後の生き方を教えるためにこの中を通されたのではないだろうか。

老化は、喪失体験だと言われる。これまで積み蓄えてきた

健康、社会的役割、肉親や友人などを一つひとつ失ってゆく。聖書にも、「年が寄って、『わたしにはなんの楽しみもない』と言うようにならない前に」(伝道の書十二・一)、「その後、銀のひもは切れ、金の皿は砕け、水がめは泉のかたわらで破れ」(同六)と、寂しい老後を記している。巷には、そういう人生を送っている人が実に多い。そういう話を見聞きするたびに、老化を暗いイメージで受け取ることになる。

しかし、主にあつてはそうではないのである。機能低下は避けられないが、その分、主に寄り頼むことができ、主の新しい力と恵みを知る機会となる。逆を言えば、神はご自分の力を現わすために、私達に老化を与えられる、と言えると思う。

「年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者も疲れ果てて倒れる。しかし主を待ち望む者は新たな力を得、わしのように翼をはって、のぼることが出来る」(イザヤ四十・三十一)とある。私はまだ、神の力を知ったとは言えない。老化はそれを知ることができる、最高のチャンスなのだ。

神はヨシュアに、「あなたは年が進んで老いたが、取るべき地は、なお多く残っている」(ヨシュア十三・一)と言っている。クリスチャンには隠居はない。まだ神の宿題が残されている。そのためには、今までの知識と経験を離れ、一つひと

つ主に導きを聞き、それに従う歩みをしなければならぬ。ヨブは辛い中を通ったが、それを補って余りある恵みに与ったのである。

以上が、第三ラウンドで学んだことである。

脆いガラスの腰となったわが腰が、これからどうなるか、それは主が知っておられる。私にとって大事なものは、これから始まる第四ラウンドである。それは、これからの私の歩み次第である。

## 夫の召天

野 口 米 子 (前田)

―天草市在住―

御名を崇めます。

いつも和義先生のお説教を送ってください、ありがとうございます。  
ございます。

かねてからお祈りいただいていた主人が、天に召されまし

た。平成二三年二月二十六日、夜九時五五分でした。翌日が主日礼拝でしたので、月曜日が前夜式、火曜日が告別式でございました。「喪主はあなただから、終りの挨拶はあなたがしなさい」と、牧師先生から言われましたので、どうしようかと思いましたが、そのままの真実を言えればいいのだからと聞き直って書き連ねました。字の間違いがありますが、どうぞ判読くださいませ。

『この度はお忙しいところをおいで下さいまして、ありがとうございます。』

長い闘病生活におきましては、いろいろな事がありました。が、ここまで長生きできましたのも、病院の先生方、また看護師様、それにご近所の方々の温かい見守りのおかげと、深く感謝申し上げます。

故人は若い頃から組合運動に携わり、そして自分の好きな趣味に凝ったりもしました。その生活を通して、周りの方々のためになったか、ならなかったか、門外漢の私には分かりませんが、でも故人が思うまま、好きなままをズーツとしてきたわけではなく、私生活におきましても、妻の私の体が弱く、何度も入院し、義母に苦勞をかけ、子供の面倒を見てもらいながら、私達のために働いてくれました。タマエ義母の

おかげで、娘達も成長させてくれました。そのおかげで義母の信仰を受け継ぎ、二人の娘も洗礼を受け、もちろん私も救われ、母娘三人で、キリスト者としての歩みをさせていただいております。

故人の人生の歩みは、山あり、谷ありの苦しい歩みでありました。晩年は、ほとんど病気との戦いで不幸であったでしょうが、私達母娘で病気の全快と、キリスト者としての救いに与る事を目標として、祈り続けました。

二月二十八日(土曜日)の夜八時過ぎに、我が家に電話がありました。私達は日頃から早寝早起きの習慣でしたから、その時はもう床についておりました。電話が鳴ったのは床についたばかりだったのでびっくりして、着のみ着のまま、慌てて着替えて車を呼びました。病院に駆けつけた時は、主人はもう呼吸が長く、その顔は静かで、わずかに息をしているだけの状態でした。

私は一生懸命、主人の手を握り締めて、「お父さん、お父さん」と叫び、何度も何度も「お父さん、ごめんね」「ごめんね」と叫ぶばかり、呼ぶばかり。娘は廊下の奥で電話をし、私は彼の肩をさするだけでした。

すると、不思議な声で、「私が悪うございました」と蚊の泣くような声で、また、「私が悪うございました」と、二度はっ

きりと聞こえました。顔を見ましたが、口は動いていませんでした。私は「ハッ！」として、「これは、奇跡だ」。あれだけキリスト教を嫌い、クリスチャン嫌いな人が……。これは奇跡だ。奇跡が起こったのだ。寝ている主人の左肩の奥から、小さな声でした、蚊の泣くような声でしたが、はつきりと二度聞こえました。ああ、主人は救われたのだ。

医者先生が、「もうこれだ」と手を上げられました。静かな最期でした。でも、あの声は何であっただろうか。私の耳に残っている声は、男性の声でも女性の声でもない。主人が今まで背を向けていたイエス様に、罪の告白をしたのだろうか。主人は天国へ行ったのだと、はっきり確信しました。正直言って、嬉しいやら、悲しいやら、なんだか不思議な気持ちです。でも、救われたのは明確です。神様、ありがとうございます。

これからは、娘と二人で信仰の歩みを、神様が示す方向へゆつくりと従って行こうと決意しました。神様、本当にありがとうございます。

これで、感謝の挨拶を終わります。教会員の皆様、それに沢山の皆様、ありがとうございます。』

## わたしの歩み

久保田 忍(大濠)

「あなた方の救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。」(エペソ人への手紙二・八)

福岡大濠公園教会に導かれ、私の証しをしなければと思いつつ、なかなか実現できませんでした。先月(四月)の大阪集会で、榎本先生が私の事をお話しくださり、今こそ主が喜ばれる時ではないかと思いいち、ここに投稿することにいたしました。

### 一、両親の争いの中で

私は一九三九年(昭和十四年)、大阪南区で生まれ、戦争中は母の里近くの福岡県朝倉郡原鶴へ疎開しました。父はシベリヤの捕虜となり、その間、母が兄(二歳上)、妹(三歳下)と私の三人の子供を育てるため博多へ出て、天神で菓子店を営んでいました。母は、家事を自分の妹に頼み、男性のようによく働きました。

私が小学校四年の時、父がシベリヤから引き揚げ、帰国し

ました。大阪市天王寺区に居を構え、復興のため、両親は共に力を合わせ、よく働きました。父の仕事は、胃下垂帯などの医療器を患者さんに合わせて作り処置する、といったものですが、仕事が軌道に乗り、豊かになりますと、両親の間に争いが絶えなくなりました。それぞれの「生き方」の違いで、しつかり者の母と一見温厚な父は常に争い、感じやすい年頃の私は、どうして両親がこのようなかど心を痛め、悩みました。中学二年生の頃から、人間はどうして争い、苦しみが多いのか、何が正しいのか、答えを求め、真理を求め続けるようになりました。

父も母も、それぞれの言い分を私に語るのですが、私はまだ物事の真実が分からず、ただ聞き役ばかりで何のアドバイスもできず、内向的になるばかりでした。母は子供のためなら全エネルギーを費やす、母性愛の権化のような人でした。父は油絵が上手で、自然を愛する人。父と母が求める世界がそれぞれにありました。しかし私は、自分なりに答えを見つけたいと、探し求め続けました。

### 二、聖書との出会い

私は勉学に励み、大阪府立の高校から受験して、私学の同志社大学英文学科に進みました。同志社は付属高校があり、

新島襄先生のキリスト教精神教育を受け、洗礼まで受けておられる学生が、数人おられました。予備校のような高校教育を受けた私には、私学で聖書を学び、余裕のある中・高校教育を受けられた友達の存在は、大きな驚きでした。その中の一人と親友になり、ある日の授業中にメモが渡され、次の言葉がありました。「いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である。」（コリント人への第二の手紙十三・十三）

これは「愛の章」の御言ですが、いつも探し求めていた「愛」について書かれた書物、「聖書」というものに強く惹かれました。インパクトがありました。両親の争いの中に「愛」のあり方が分からないで、乱れた糸のような心になっていましたので、もっと知りたいという思いにかられました。

大学生活では、聖書のクリスチャニティについてディスカッションすることが多くありました。私は大学に入って初めて聖書に触れましたので、話し合いの中では静かに聞いていました。また他の友達から小形聖書をプレゼントされました。まだその頃は、聖書は信仰の対象ではなく、「英文学の背後にあるものを調べるための、参考書として読んでいました。

同志社の英文科で新島襄先生を尊敬され、敬虔なクリスチャンの北垣宗治教授は八十歳を超えておられますが、今でも

ライフワークとして新島襄先生の研究をされ、毎年、ポストンのアーモスト大学に行っておられます。いずれにしましても、私は大学で聖書に導かれたと確信しています。

### 三、結婚

私は両親の不仲を見ていましたので、結婚に対して夢がなく、オールドミスになるものとはばかり思っていました。そういう私を母が心配をして、誰かに引き回してもらいたいと思っていましたところ、東京の医学生で友達が多く、遊び人の兄が連れて来ましたが、私の主人です。

主人は慶応義塾大学在学中で、夏休みのために宮崎の延岡へマイカーで帰っていましたが、二学期が始まりますので東京へ向かう途中、私方に立ち寄ったのが始まりです。母がちょうど主人に連れ回して欲しいと頼んだようです。夏休みの終わり、私も宿題の整理で忙しく、はじめは気が乗りませんでした。三度ほど出会った時、この人と結婚して、「愛」とは何か、「結婚」とは何か、納得できるかもしれないという「示し」を感じました。今思うと、神様が働いてくださったのだと思います。

私達は同学年で、四年生の私の誕生日に婚約しました。就職がどうなるのか、この世的な考えは全くなく、ただ自分の

インスピレーションを信じて決断しました。

結局、主人は三菱重工、産業機械科に就職、一九六二年(昭和三七七)秋に結婚、新居は甲子園口の主人の両親宅(両親は延岡からここに移転)の、廊下伝いの「離れ」です。そこは主人の兄が暗室として写真の現像用に使っていた流しとガスコンロが一つあるという台所で、つつましい新婚のスタートです。

その日の献立だけ給料で賄い、他の費用は親掛かりでした。翌年には長男が生まれ、一年七ヶ月違いで次男が生まれました。両親の方には、延岡社宅の時から仕えているお手伝いさん(十八歳)がいましたので、随分助けてもらいました。

子供達が幼稚園の頃、主人両親宅から近所の明和マンションに移り住み、親元を離れ、子育てが忙しくなりました。長男は小児喘息があり、私は不安のため、いつの間にか心で神様を求め、祈るようになりました。その頃、実家の母も仏教の信仰を深めていました。長男の喘息が治るようにと、母はよく加持祈祷をしてくれました。まだ私は本当の神様を知りませんでしたので、母の力に頼っていました。次男はおとなしい手のかからない子で、長男にばかり手がかかってしまいました。

長男が小学三年の時、母の勧めで長男の改名をしました。私も久保田(旧姓奥村)に嫁いで、名前が「忍」一文字で頭が重

く、ちょうど身体的にも気持が重くなり易かったものですから、一緒に変えました。長男は「臣一」から「晃司」に、私は久保田英津子(フランスがいいです)になりました。

その後、母は五九歳でこの世を去りました。名前を変え、私はいつも心でお祈りをするのが常になりました。

#### 四、アメリカ駐在員となって

主人は仕事中心の人でしたが、長男の事が気になったのでしよう、アメリカ、メリーランド州ボルティモア駐在の話があるが、アメリカは空気が良いので、晃司のためお受けしようと思う、と話してくれました。「ボルティモアは日本人がいな所だが、行つて見るか」と聞かれ、あまり不安も感じないし、子供のために転地療法にもなると思つて、すぐ決心しました。ボルティモアは大西洋の海も近く、海に囲まれた日本人には向いています。子供達の第一の印象は、「北海道のド田舎のようだ」でした。

一九七九年から五年間、ボルティモアの生活になります。主人は三井物産とアメリカとの合弁会社MCMCを、初めて設立するための赴任でした。日本人が一人もいないと聞いていましたが、二世の方や戦争花嫁でアメリカへ渡つた人など大勢おられ、案じたものではないと思ひました。特に私は、

日本で草月流のお花を習っていましたので、ボルティモアで二世のメーリー杉山先生(東海岸草月流理事)の所で、お花のお稽古ができて幸いでした。彼女は草月流の家元がアメリカへ来られた時はいつも、お世話をなさった方です。

また、私の家はダウンタウンから少し離れた郊外で環境の良い所にあり、ゴルフ場がスーパーへ行くより近くにあつて、主人、次男、私の三人はゴルフ三昧でした。長男は大好きなスポーツカーの改造に余念がなく、喘息はいつの間にか出なくなっていました。

帰国する二年前ぐらいから、日曜日は私だけ、家に近い「モンクトン教会」にも、出かけるようになりました。そこは主人の会社の社長、リトルトン夫妻もみえる教会で、毎週日曜日にお会いでき、よいお交わりをさせていただきました。しみじみ神様のお導きを感じさせていただきました。

アメリカ在住により、アメリカの文化、生活を深く知ることができ、何よりの体験でした。子供達はパブリックの高校までボルティモアで、大学は、長男はボストンに、次男はフィラデルフィアに行き、それぞれ学生寮生活です。

## 五、精神病院に入る

一九八三年九月、五年間の駐在を終え、子供二人をアメリ

カに置いて、主人と私は帰国いたしました。海外駐在後は、本社勤務が義務付けられていますので、東京杉並区の社宅、下井草アパートに住むことになりました。主人は営業マンですので、帰国後も海外・国内と出張が多く、私は文化センターで江戸小唄のお稽古をしたり、イケバナインターナショナル東京支部の集まりに参加したりの生活でした。

月日が流れ、アメリカの長男はアメリカ女性と結婚し、ボストンの製薬会社で働き、次男は大学卒業後、日本の帰国子女として旭化成に就職し、埼玉独身寮に入居といった状況の中、私に変化が起りました。それは私の中学時代、母とも親しかった数学の先生が教師を辞め、「神理を学ぶ会」を起し、信者を集めておられるところに誘われたのです。

母が地獄に落ちているので私が神理を学び、救い出してあげなさいといった誘いを受け、研修会に出かけるようになりました。そこには霊導者が何人かおられ、先生の何かの作用で霊導者を通して死者が語るのです。私の母も呼び出され、母の声を聞かされました。暗い世界の母を、明るい世界へ救い出すために、私は自分の自己反省をノートに書いて行くという研修を続けました。

一九九二年、そうこうしている内に、ある日突然、精神がおかしくなり、幻聴のささやきが聞こえ、何者かに追い駆け

回され、怯え、逃げ回るといふ奇行を現わしていました。

主人は出張中のため、次男の所に知らされ、夜、小雨の降る中でしたが、下井草まで来てくれました。どんなに驚いたかと思えます。息子の前で、私は三度ほど車に飛び込んでいました。幻聴に引つ張られました。今になって思いますと、あの時、私は完全にサタンに支配されてしまっていました。混乱している私を連れて行ってくれました所は、精神科で有名な松沢病院でした。次男には本当に心配をかけ、また、次の日に帰って来た主人にも大変お世話になり、心配をかけ、申し訳なく思っています。

病院では強い注射を打たれ、鍵のかかった独房で、一晚過ごして様子を見られるといった状態でしたが、発作(?)の次の日、普通の部屋に移された時、まるで地獄から天国へ行けたような気持のよい解放感を覚えたものです。

その後の処置は、強制的に薬を与えられるだけで、後はレクリエーションに参加したりして、時を過ごすのでした。私は病院にいて、どこが悪いのか分りませんでした。病名は、感応精神病ということでした。精神病院は一度入院しますと、なかなか出してもらえないのだということを知りました。入院一ヶ月ほどで、やっと退院できました。主人がその間、よく病院まで通って見舞ってくれましたことが、本当に感謝で

した。退院後も薬をもらい、一ヶ月に一回は病院通いでした。私としては、闇のような時期でした。

サタンの支配はまだまだ続き、一九九三年、杉並の病院で子宮癌が見つかり、医者の兄の友人で慈恵医大外科部長の赤羽先生を紹介され、手術ということになりました。慈恵医大婦人科の落合先生の診察を受けましたところ、これは癌ではなく、「悪性リンパ腫」です、身体他の部分も検査しなさいという事で、検査のため一ヶ月が経過。結局、大腸にポリプが見つかり、出血し始めていました。四月に慈恵医大初めての試みという外科スタッフと婦人科の落合先生が共同で執刀され、子宮、卵巣、直腸ポリープ除去手術が行われました。

その後、ワンクール十回の抗がん剤を一週間に一度、通院で受けました。

手術の成功と慈恵医大がリンパ腫に権威があつたこと、落合先生という良い先生に出会えたこと、全てに真の神様がお働きくださり、お導きくださったのだと、今、聖書の正しい教えの下、感じさせていただいています。

精神病院、手術という体験を通して、身も心も粉々に砕かれた思いです。その間、主人をはじめ、子供達にも心配をかけました。心から感謝あるのみです。



## 六、福岡転勤、再び入院

一九九八年十月、主人が三菱重工定年退職、関連会社に向、西公園に転居することになりました。引越しの疲れから、精神病的発作が出て、国立病院九州医療センターに入院。

博多どんたくが病室から見えましたので、時は五月でしょう。

症状は発作がなくなると、全く普通になる。ただ薬でボーとしている。病院は清潔で、大変気持が良かったです。この病院の中で悔い改めの心が込み上げ、思わずノートに書き記していました。主人が毎日見舞って来て、一つずつノートの言葉にアドバイスしてくれましたことは、有難かったです。やがて、妹が神戸から見舞いに来てくれました。私のノートを読んで、これは教会でないと治らないと言って、もう一日滞在し、教会を探すことになりました。

## 七、福岡大濠公園教会に導かれて

教会とのご縁に関しては、妹の力に助けられました。ヒュー・ブラウン宣教師が妹の娘(真輝)の英語の先生として、妹の家に深く関わっておられました。妹は私の教会の事でこの先生にまず電話をかけ、西公園の近くの教会を教えてください旨を伝えました。そこで先生が、以前、親交のあった金生一郎先生をご紹介くださったのです。金生先生は八幡前田教会

の榎本利三郎先生の下で学んでおられましたので、西公園だったら三十分くらい歩いた所の福岡大濠公園教会が良いでしょうという事で、榎本和義先生の電話番号が知らされ、榎本先生との出会いとなったのです。

日も暮れかかった頃、妹が私の病室に来て、退院したら福岡大濠公園教会に行くようにと伝えて、神戸へ帰って行きました。

その後、退院しましても、「うつ」と同じ症状で家事があまりできず、力が出るまですぐには教会へは連れて行ってもらえませんでした。

主人は、私が精神病院に入ることになったのは宗教のためだと、宗教に対する思いは厳しいものでした。私は内心、主人が教会に連れて行ってくれるかどうか不安でした。今思いますが、私の第二の人生のキープポイントは、主人が私を教会に連れて行くかどうかにかかっていたように思います。神様はこのような時、主人に働きかけてくださり、その思いを起させ、実現に至らせてくださったのです。

セーターを着る頃、遂に主人は「教会へ行こう」と、私を連れ出してくれました。妹から教えられた福岡大濠公園教会を探して(方向のしっかりした主人は大変頼りになりました)、やっと教会に辿り着いたのです。榎本先生は数人の子供達に

囲まれながら、近づいてくださいました。「お待ちしていました」と、優しくお声をかけてくださり、心が和みました。

精神科のお薬のため体は弱々しく顔色も悪く、精気を失って死人のようになって、先生のお説教をお聞きしました。お話の内容はまだついて行けなかったのですが、講壇の右手に掛けられています標語の御言、「見よ、私は全てのものを新たにする」(ヨハネ黙示録二一・五)が目にとまり、何度も何度もゆっくり読み返しておりました。私はこの御言に救われたのです。お説教の終わる頃、私のうつむいていた顔が、上を向いていたそうです。

一九九九年、新しい年になり、私の教会通いが始まりしました。大学時代に触れた聖書、新しい聖書を先生に求め、先生のお説教により聖書の解き明かしがなされ、今まで求めていた真理の謎が解けて行く思いです。うれしかったです。

「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。」

(ヨハネによる福音書十四・六)

「聖日礼拝」、「婦人会」、「会堂掃除」と、家から三十分ほどの所にある教会は、出かけて行くのに絶好の場となりました。霊肉共に強められ、次第に元気になって行きました。

一九九九年九月十九日、私の受洗日です。教会へ通い出し

て受洗まで、あまり時間はかかりませんでした。ずっと長い間、求めて続けていましたから。そして、この先生のほかにお受けできる先生はない、という思いがありましたから。

良き牧師先生に出会えたこと、本当に神様の奇しき御業によるものだと、感謝の気持ちでいっぱいです。

なお、洗礼はちょうど六十歳の還暦に当り、名前を「英津子」から本名の「忍」としてお受けしました。

#### 八、大阪集会の喜び

福岡での生活は三年余りで、受洗後間もなく、主人の任期が終わり、西宮に帰ることになりました。転居に当り、神戸生田教会へ客員としてまいることになりました。生田教会は、金生先生が神学生の時、修養された教会です。

西宮でも毎週教会に行くことができますことは、とても恵みでした。主人も福岡の時のように隔週ですが、続けて教会へ出かけています。さらに幸いなことに、毎月第三火曜日は大阪集会に集わせていただくことができ、私の信仰をより深めることになりました。

いつも大阪集会のため、福岡大濠公園教会、八幡前田教会の皆様がお祈りくださっていますこと、心から感謝いたします。榎本先生が遠く九州から集会のため、土佐堀のYMCA

までお出かけくださり、聖書の学びをさせていただけるとは、何と恵まれていることでしょうか。主が備えてくださる恵みの御座は聖霊に満たされ、心が清められ、新しい命が与えられますから、集わせていただく度に、力が湧いてきます。月に一度の大阪集会を、いつも待ち望んでいます。

この集会には、妹(井上那智子)一家も集うことになり、私を榎本先生に導いてくれました妹が、今では家族で救いに与り、不思議な御縁を感じます。

毎月の先生の御教えにより、十字架の意味が全く分からなかった私が、十字架こそこの世で一番大切なものであり、どんなに尊いものであるかということ、心で受け止めることができるようになりました。そして、「愛」について、「神は愛である」と、人間のエネルギーの根源である「愛」というものを明らかにしていただき、私の気持のモヤモヤが、少しずつ薄れてきました。

イエス・キリストこそ命であり、いつもイエス様を思うことにより、命となり、永遠の命へ導かれて行くことを、迷いなく信じるようになりました。

## 九、バケーション

二〇〇〇年、ポストンの長男夫婦に男児(ミレニアムベイビ

ー)が恵まれて以来、毎年夏休みの七月から八月にかけて、ポストンに出かけるようになりました(約一カ月滞在)。初めてポストンの息子宅を訪れた時、学生時代に別れて以来の出会いでしたので、息子がすっかり自分の家を構えている状態に、思わず次の御言が響きました。

「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、あなたに示す。」(エレミヤ三三・三)

日本から遠くにいます息子に、私は何もできませんので、いつも主を呼び求め、お祈りするのが常ですが、ポストンの家を訪れ、主の御業を見せていただき、感謝の思いが込み上げ、感動しました。息子もよく努力しましたが、その背後で主がどんなに働き、お助けくださったかと感謝ばかりです。そして、「みことば」は、真実なのだと確信しました。

この十年間、年に一度ポストンへ行くことができ、アメリカ的バケーションを楽しませていただきました。

ついですが、息子の家からそう遠くない所に、新島襄先生が学ばれたアーモスト大学があり、早速、息子に連れて行ってもらいました。大学のキャンパスにあるチャペル、その中に掛かっている先生の肖像画、また講壇を見ながら、先生がどんな思いでイエス様の事を学ばれたかと、しみじみ偲ば

れました。

私と主人が毎年ボストンに出かけますので、次男（東京都江戸川区在住）も、自分もハワイまで行きたいということで、ボストンへの途中、ハワイで次男家族と一週間過ごすようになりしました。次男も、長女、長男、次男の双子の男児に恵まれ、子供連れで広々としたコンドミニウムで共に過ごすことができ、何よりのバケーションとなります。

神様は祈りに答えて、素晴らしい事をしてくださいました。ボストン、ハワイ旅行は、主人の綿密な計画に助けられています。神様は主人を用いてくださり、バケーションを楽しませてくださいます。ありがとうございます。

#### 十、隠居生活

夙川のマンションで、主人と私は全くの隠居生活です。主人の両親も、父は九四歳、母は九三歳までこの世を過ごされ、召されました（私の父は八九歳で）。主人は両親の世話を思い残すことなくさせていただき、身が軽いようです。

毎週土曜日は、メンバーのゴルフ場へ出かけ、隔週の日曜日は私と一緒に生田教会へ出かけます。その他は仲良し友達とのゴルフが月に一回といったことが中心で、ほとんどは野球のテレビ観戦です。

私もカルチャーセンターには全く縁がなくなり、専ら信仰一筋の生活です。受洗して十一年が過ぎましたが、今では神様の御心を知って、神様に喜ばれる事を行うのが、生きがいとなりました。

いろいろな事がありました。ずっと主が共にいてくださり、お働きくださっていますことを覚えます。数え切れないほどの主の恵みを受け、生かされています。心が感謝します。日々、御言に立って歩ませていただくことが楽しみとなりました。主の御愛の広さ、長さ、高さ、深さが理解できますようにと祈りながら、心満たされ、平安が与えられています。毎週の聖日礼拝で主を心から賛美、礼拝し、子供達の平安を願うことも、喜びとなっています。

「万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。」（ローマ人への手紙十一・三六）



## 八幡前田教会に導かれて（前編）

松原宏篤

（北広島チャペルキリスト教会）

### 一、私事

まずは私自身の事を簡単に説明させていただきます。

私は普段は北海道にいながら、東京の会社にアルバイトとして所属し、全国の国道、県道、または全国の空港の道路の状態を調べるために、特殊な車輛を走らせ、全国を巡ってました。

職業柄、出張中はどうしても一つの教会に根を下ろして信仰生活を……ということが不可能で、あたかも荒野をさまようイスラエルの民のように見えてしまうかもしれません。

その旅路の道中、後になって明るみになる、主の偶然のようである導きにより、平成二三年十月中旬、一ヶ月半に及ぶ名古屋市内調査を終え、続く調査のため北九州市へ、八幡東亀の井ホテルに到着したのです。

### 二、伏線

出張では必ず、北広島チャペルキリスト教会牧師、木村恵

一先生に滞在住所をメール送信し、近隣の教会の連絡先を数件案内していただいていた。例に漏れず、北九州出張においても三件ほど、教会の連絡先がメール返信され、そこで祈りつつ教会を探していたのですが、北九州市では、ホテルから一番近い教会に行こう、と考えていました。人間の感覚に訴えると、ずいぶん簡単な理由ですが、主にある最善の導きとしたら……。もしかしたら前回の名古屋出張、東海市の教会まで一時間半を要して通い続けていたのは、八幡前田教会の導きへの伏線だったのかもしれない。

「前回はとても遠かったのですが、今回はとても近い教会へ」。私はそのような単純な考えを捻り出しましたが、主のご計画、導きは複雑で人間には悟り知れず、底知れぬ深い愛とお考えをお持ちなのは、トータル二ヶ月以上にも及んだ福岡県出張、そして八幡前田教会滞在を通して、さらに知る恵みの機会となったのでした。

### 三、最初の礼拝

平成二三年十月十六日、初めて八幡前田教会へ導かれました。数日前に電話でご挨拶はしていましたが、いざ導かれると、瞬く間にメッキが剥がれるように、突然現れた私が一体、どのような見られているのかと、人目を気にし始めました。

見えない主を信じていくにあたって、見える人間を気にしてオロオロしてしまう私は、毎回の事ながら「ああ、信仰の薄い人よ」と怒られてしまいそうです。しかし、そんな人を気にして右往左往する私の弱さを、主は逆に用いてくださっていたことが、後々になって振り返られます。

礼拝中、私は落ち着かなくて、チラチラと周りの皆様の様子をみていました。そこで目に映った光景……。静まって礼拝する皆様が、何か、内側から表現しがたい透き通った綺麗な雰囲気を出しているように見え、不思議に感じました。聖霊様が働いている、御霊に満たされている、とはこのことなのでしょう。 「一人ひとりが内側から生き生きとしている」という感想を持ったのです。そして、お祈り、賛美、説教……。礼拝の全てに、今まで経験したことのない空間を感じていました。

しかし、「献児式とは？神癒会とは？今まで聞いたこともないけれど？」と、自らの知識で理解しようとした私は、かえって混乱をしてしまい、そのまま第一回目の八幡前田教会礼拝は、主が与えてくださった新しい沢山の恵みを味わい感謝することもままならず、勝手に自身を疲労させてホテルに戻ったのでした。

#### 四、ホテルでの祈り

部屋に戻ると、なんとも言えないような虚無感……。これで良かったのか、今回導かれた教会と主にとっても失礼なことをしてしまったのではないだろうか、与えてくださった恵みに好き嫌いをしてしまったような罪悪感に襲われました。私自身の信仰の浅さが招いたことでした。事実肉眼で、教会の皆様がキラキラ輝いているように見えたことや、礼拝全体の、静まりを持った厳肅な雰囲気を通して、「何か凄い」という感じを受けていました。しかしそれが何であるのか、頭で理解しようとする不安になりました。「水の上を渡ってみもとに行かせてください」（マタイによる福音書十四・二八）と主に願い、その通りに水の上を歩いたのに、吹く風に恐れを抱き、沈みかけて叫びだし、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」（同三一）と怒られたペテロ。

祈り願ひ、恵みを与えられたのに、自身で勝手に恐れてしまう……。まさに私のことでした。静まり、ホテルの部屋で悔い改め反省、そして、「初めてのことでわからなかった沢山の恵みをどうか教えてください」とお祈りし、夕方からの勤務に備えて仮眠に入りました。

そこで主は、人間の考えでは到底及ばない、驚くべき方法を用意し、私をヒョイと持ち上げ、周りを大きく動かされる

のでした。

## 五、計測車故障

それから三日後の夕方……。太陽も大分沈み、私たちは計測車に乗り込み、現場へ向かっていました。現場へ到着するまでに、計測機器を立ち上げるのですが、その行程の最後、道路に照射させるレーザー光線が正確に対象物を捕らえると、『OK』のグリーンのランプが点灯し、計測準備完了となるのですが、この日、レーザーを発射するスイッチを押して点いたのは、隣の赤い『NG』のランプ。なんと、計測車のレーザーが壊れてしまいました。軽症な故障だと、修理スタッフを現地に派遣させて修理を行うのですが、レーザー故障とほぼ同時に路面の凹凸を捉えるカメラまで故障してしまい、今回は重症で、修理工場のある神奈川県平塚まで計測車を戻さなくてはならなくなりました。

八幡前田教会に電話をし、一旦、東京に引き返す旨を伝えて、二日かけて東京に戻りました。もし、故障内容が深刻で、時間を要す修理になるようであれば、私の出張はこれで終了。北海道に帰ることも有り得ました。たった一度、しかもよくわからないまま教会を後にしてしまうのは、自身も切ないですし、対応して下さった皆様にも本当に申し訳ないと思い

ました。

しかし、計測車が直るのか長期修理になるのかは、まさに神のみぞ知る少し先の未来のこと。祈り委ねて、しばらくして悶々としてまた祈り……を繰り返して、週末を東京で迎えました。

## 六、隣の県は意外と遠い

迎えた日曜日朝、私は東京八王子のホテルをチェックアウトし、埼玉入曽キリスト教会へ向かいました。八王子にも沢山の教会がありますが、その時は、所属している教団（福音バプテスト宣教団）の教会だから、という理由で入曽へ向かうことを決め、電車で揺られていました。前日夜に例の如く電話でご挨拶をした際、「八王子から行きます」という関東初心者のお返に、電話先の声は少し上擦っていました。地図で見てもそこまでビックリする距離ではないだろう、と思っていたのですが、結果は二時間半を要してしまいました。途中、電鉄会社を跨ぐ電車の乗り継ぎ方法を間違え、改札ゲートに挟まれるなど、都会ならではの社会勉強も軽く経験し、大量の荷物と共に教会に着いた頃には、すっかり大冒険を終えたような気持ちになり、その日の労はそこで終了してしまいました。ですが、そのような労も、簡単に益と変えてくだ

さるのが主です。

## 七、祈りの答え

十名ほどの落ち着いた雰囲気教会、礼拝そして交わり……。入曽キリスト教会は慌ただしい現代の流れを超越するような、とてもゆつたりとした時間の流れを感じた教会でした。やはり、主が住まう教会、そして、その教会に導かれる地域の人々……。主はその地域の人々の賜物を存分に用いてくださるから、一つひとつの教会が特徴をもって輝きを放つのかな、と思いました。また、北海道という、遙か北の大地からやって来たこの者も、迎えてくださる皆様にとつては珍しく新鮮に映るのでしょうか。北海道の土地、気候や自身の仕事に関する事など、多岐に渡る話題で祝される交わりを経て、現在出張中の北九州での教会に進みます。「八幡前田教会？もしかして、カノオという人がいませんか？」驚くべきことに、また少し声を上擦らせた入曽キリスト教会牧師、小島清志先生と、八幡前田教会伝道師、金生一郎先生は同じ神学校を卒業した先輩と後輩に当たる、古くからの友人であることが分かりました。そして小島先生を通して、八幡前田教会について、私が知らなかった沢山の恵みが、次々と光に照らされるように明らかにされていきます。自らの限られた知

識の中で、主の造られた世界を見ていた小さな私の「わからなかった恵みを教えてください」という、ホテルの一室での祈りが、福岡県で祈ったことが、埼玉県で示されました。祈りの答えは私にとって、入曽キリスト教会で与えられることがベストであったことは明白であり、あまりにも的確なタイミングで与えられた真実に、人間、時間、教会、計測車……、全ての被造物の配置をもって示された、主の完全なる支配を、恐れ多く感じたほどでした。

そして計測車も無事修理を終え、この日の夕方には、東京有明港を出発し、フェリーで再び北九州へ向かい、主からいただいた新しい恵みを握り締め、再び八幡前田教会へ導かれて、恵みから恵みへと、幸いな旅路を歩ませていただくことになったのです。

「わたしはあなたをほめたたえます。

あなたは恐るべく、くすしきかただからです。

あなたのみわざはくすしく、

あなたは最もよくわたしを知っておられます。」

(詩篇三九・十四節)

前編 終



## 前田教会と戸畑教会との思い出

権 藤 節 美 (戸畑)

(旧姓 小正路)

「わたしは道であり、真理であり、命である。」

(ヨハネによる福音書十四・六)

この御言は、二〇〇七年、神様が伊規須先生を通して私に与えられたお言葉ですが、私はこの御言で、一層信仰へと導いていただくことができました。今回これを感じとして、「ぶどうの木」に投稿した次第です。

私は昨年(二〇一〇年)十二月十一日(土)、伊規須先生と、同じく戸畑教会員の松山兄を証人とし、神様の下で誓いを立て、私の夫である武宏兄と結婚を致しました。

夫はクリスチャンではありません。ごく普通の人ですが、伊規須先生とお話しをしている間に、だんだん親しみが湧いて、先生の事が好きになったとかで、本当は戸畑教会で挙式する予定でしたが、先生が体調を崩されて、教会も休止となつてしまい、二人で「どうしようか」と迷っていました。一時は挙式を取りやめて披露宴だけを行うつもりでしたが、ある時、松山兄から「今から先生の所へ行こう」と誘われて、

私達は行くことになりました。それが、二〇一〇年十二月十一日の出来事だったので。次の日が披露宴だったので、私達は先生の所へ行って挨拶をして帰るのだろうと思つていましたが、実はそうではなかったんですね。そのまま、挙式となりました。

神様は何と素晴らしい事をなさるのだろうと、本当に感謝いたしました。あれから二〇一一年六月で結婚生活半年を迎え、先生が倒れられてから一年になろうとしています。

ところで、私が今通っている八幡前田教会は、私が十八歳の時、一九七七年四月、幼馴染の松永有美子姉から誘われて、やって来た教会です。当時の私は、教会なんて初めてですから、全く分からないまま、「どんな教会なんだろう。どんなことをするのだろう……」、不安と期待を膨らませながら、当時牧師だった榎本利三郎先生のお説教を聞いていました。

それから一年が経ち、今度はサフラン会(今の青年会です)の太田久美姉から「サフラン会に入りませんか」と誘われて入る事に……。あの時の事は、つい昨日のように、今でもはっきり覚えています。主な人は、野村仰一兄、太田久美姉、野口美加姉、松山智昭兄、森章年兄(戸畑)、吉田智子姉、古野とみ子姉、松永有美子姉だったと思います。

夏には日曜学校の子供達と一緒に津屋崎の夏期学校(海で

泳いだり、キャンプファイヤーをしたり)、そしてまた、林間学校(帆柱のキャンプ場)などに参加させていただきました。

それから二十歳になってから、サフラン会の人達ほとんどが遠く離れて行ってしまいバラバラに……。二一歳の時には潰瘍性大腸炎という病気になって、一時は入院を繰り返す事に……。この病気は国の指定疾病にもなっており、なかなか治りにくいもので、難病と言われておりました。そんなこんなで、私はもう教会へ行くのも諦めることに……。

ところが、神様はまたもや私を見捨てずに、今度は松山兄のお誘いで、戸畑教会へと導いてくださったのです。そのおかげで、私の体調も嘘のように元気になり、治らないと言われていたはずなのに、十年もかかりましたが治すことができました。その後再発もせず、現在に至っておりますし、結婚へとも導いてくださって、本当に神様に感謝を致しました。

でも一つだけ、私の中で悩みがあったのです。それは、どうしても先生や教会員の皆さんとなじめなかったこと、また打ち解けられなかったことです。実は、私は人見知りが激しいというか、人との接触が苦手というか、大嫌いでした。だから笑ってごまかす(？)、そんな事をしていたのです。先生や教会員の皆さんから(ある人の言葉を通してですが)、「小路さんは、どうしてももっと私達に心を開いてくれないので

しょうか」と言われました。本当は皆さんと馴染みたかった、お話ししたいと思っていたのですが、こればかりはどうすることも出来なくて、今では皆さんに対して済まなかったと反省をしています。

それから何年か経って、伊規須先生が奥様を亡くされておひとりになってからのこと、先生から持ちかけられたのが、今もやっています説教テープ起しです。初めは「こんな私に何ができるのかな、どうやってよいものか」とすごく悩みましたけれども、やってみて本当に良かった。投げ出したりしないでよかったですと思います。一度は教会や神様に対して悩んでいた私ですが、テープ起しをやっている内に、神様の事も次第に分かってきて、私がどれだけ恵まれ、守っていただいたかを知り、本当に神様って偉大だなあと実感致しました。

そうこうしている内に、今度は畠山姉の提案で、日曜日の礼拝後、日曜学校が開かれることになりました。あの当時は、まだ子供達も小さくて、どうなる事かと思っていました。お母さんたちとも交わることができ、また神様の手の内に大きな恵みを賜ることになりました。

子供達は、畠山姉のお孫さん三名(畠山聖菜さん、仰太君、桜さん)、私の姪二名(末富愛実さん、汐莉さん)、他に外園まなさん、小林勝利君などです。私はいつの間にか日曜学校の

オルガンの担当を務めたり、教師としての使命を与えられたりするようになっていました。子供達もみんな神様に近づくことができ、本当に良かったと思います。

それから、年に一度、神様は日曜学校の遠足も与えてくださるようになり、そこで皆さんと一緒に、神様と触れ合うことができ、感謝しました。こうしている内に、子供達もどんどん成長して、日曜学校の方も、私達(松山兄と私)と先生の教師会だけになってしまいました。

その後の伊規須先生の御苦労も大変だったと思います。それなのに、私達は何もできない……。ただ祈るのみでした。先生が倒れられ、何十年振りかで再び前田教会へ戻ってきて、夢にもこんな事が起こると思っていまいませんでしたが、今は戸畑教会が一日も早く再開されるようにと待ち続けるとともに、祈るばかりです。これからもよろしくお願いいたします。



## 命のおことば

伊 規 須 太 郎 (戸畑)

ことばがしゃべれなくなると

(構音障害・言語障害・失語症など)

生きることがむつかしくなる

しかし憐れみ深い父なる神様は

私どもを呼び覚ましてくださる

「そこにて汝らに会い 汝ともこのいうべし」と

(出エジプト記二九・四二)

交わりの中から引き出されたいのり

「この諸々の年のあいだに

汝のわざを生き働かしめたまえ

この諸々の年のあいだに

これをあらわしたまえ

怒る時にも憐れみを忘れたまわれざれ」(ハバクク書三・二)

憐れみの対象は第一に私である

主はすべてをご存じであり

み心のままに最善をなさるのであるから

ご愛に信頼してすべてをお委ねし 安んずるのみ  
すでに祈りの着弾が見え 水柱が上がっている

終わりの有り様は人知の予測や恐れとは異なっている  
鍵は人間が活ける主の前に謙虚になること  
そこからすべてが見えてくる

この星にしばしの時を許された者の使命！  
もう一度叫ぶ 主よ憐れみたまえ

(二〇一一年一〇月 於 極東)

## 前倒し

幻 視 人

A あなたにお別れする日が近いように思いますが、あなた  
のお心に何かあるように感じて、心残りです。

B 実は、十年ほど前、一人娘を家庭内事故で亡くしました。

私達の過失であって誰をも責めることはできませんが、不  
憫で諦めることができません。今頃どうしているかと思う  
と、心がうずきます。(テサロニケ人への第一の手紙四・十  
五〜十八参照)

A あなたの体験には及びませんが、私も聖書のお言葉で慰  
められたことがあります。妻の最後は、無残なものでした。  
衰えるだけ衰えて寝たきりになり、無意識になり、まさに  
「生ける屍」でした。しかし、聖書によると、終りの日、  
主の前に立つ時(信仰によって私もそこにいました)、彼  
女は完全な健康体として、御使のように身軽く主に仕えて  
いました。(イザヤ書六・一〜三参照)

ただし、地上の人間関係はリセットされており、夫対妻  
ではなく、二人とも主に向かって御使のようでした。  
(マルコによる福音書十二・二四〜二七参照)  
そのとき、すぐ近くを十歳くらいの女性が通り過ぎまし  
た。アツと驚きました、お母さんソックリだったからです。  
すぐそれと分かりました。

A 私は祈って、神様にお尋ねしました、「主よ、よみがえ

りの日に、御使のように仕える人々の姿を見ました。では、その日、その時から遡った(前倒し)姿を見ることができるとでしょうか、たとえば十歳の姿を？」と。  
主はお答えになりませんでした。しかし、私は確信します、きっとお許しになるに違いないと。

## 信仰雑感 (四)

首 藤 正 (前田)

### 一、梅雨の晴れ間

梅雨時のことだった。夏祭りに着て行く浴衣を買ってあげようと家内が言い出して、小学校高学年の孫娘達を親ともども連れ出して、まずデパートへ行つたが、心当たりの店から店へ当ってみるが、これはという物がない。

それじゃ、商店街に行つて見ようというわけで、家内、親、孫娘、それに私と、どこか呉服屋さんはないかと、あつち見こつち見と流して行くが、子供用の浴衣なんて今どき取り揃えている所はなさそう。もう半分以上諦めかけて、今日は止

めにして、日を改めて他所に期待しようというところまで来た。

みんなの後からついて行きながらそんな空気を感じ取って、私は胸中祈つてみた。もし主がよしとされるなら、せっかくのチャンスで皆が揃っているここで、お目当ての浴衣に辿り着かせてください、と連れの者達をはばかり、胸中でお願ひしてみた。

すると、街はずれの隅っこに小振りで目立たない呉服屋さんらしき店に、まず家内が目をとめ、駄目もとで覗いてみましょうかと言ひ出し、みんなでぞろぞろ入つていった。私は品定めには何の役にも立たぬ不調法者だから、入口近くで突っ立っていた。

「いらつしやいませ」と老店主夫妻の声が掛かり、希望を聞くと、待つてましたとばかり、小さい店内のどこから出てくるか分らないが、次から次にと畳んだ袋入りのを持ち出して、これはどうでしょうと見せてくれる。そして問はず語りに、最近の子供さん用の浴衣の需要は少ないのですが、今年は思い切つて余計に仕入れたんですよ、と恩着せがましく(?)言う。それはそれはラッキーだったと、祖母、親、孫娘三つ巴となって、品定めに血道を上げる。所在なさに出口に控えている私を見兼ねてか、椅子を勧めてくれたのを幸い、

腰を下ろして成行き如何にと眺めているともなく眺めている内に、やっと選定が終わり、店主の勧めで帯も買い、その又上に、下駄までも揃えて三点セットずつを包んでもらい、おまけしときます、の代金を家内が払って、意気揚々と引き揚げる一行の最後尾を行きながら、これが「隠れたことを見せてください」という構図なのかと思ひ当り、そう言えば、アブラハムの僕が主人の命令でイサクの嫁探しにメソポタミヤまでやって来て、井戸辺で捧げた祈りに即答えられて、リベカが甲斐甲斐しく水を汲んで飲ませてくれるその様子に、まざまざと神意を認めたという故事があつたなあと思ひ合わせたことだつた。

折柄の雨模様の中を足取りも軽く、晴れ晴れと感謝と賛美を捧げつつ、帰途についたのであつた。

## 二、葦の弁

艇子(てこ)でも動かぬものを、「岩のようだ」という。押しでも引いてもびくともしないのを、盤石の如しという。その岩に例えて、ヨハネの子シモンに、主は、ペテロ(岩)という愛称をお付けになつた。

ところが、そのペテロの行状を見て行くと、出たり引つ込んだり、上がったたり下がったりで、とてもどつしりという印

象を持たない。ことによると、そうあつて欲しいという願いを込めてつけられた主の親心に発する名称だったのかな、とさえ思える。

同輩に抜きんでて素晴らしい信仰告白をするかと思うと、一転して、そこらへんの常識人そのけに出しゃばつてさくらげに、こそつと主に諫め申し上げ、逆に「サタン」呼ばわりを受けてしまい、シユンとなる。

「死にも獄にもついて行くことを厭いません」という覚悟のほどを口にした舌の根の濁かぬ先に、「そんな者のことなか、誓つても知らん」と関係を否定する。

よく言われるし、納得もすることだが、そのペテロさんの有りようは、まるでイエス様を信じて歩いていっているつもり自分の実際の姿を鏡に写して見るようだと、反省の種にもなるお人だ。

岩ではなく、鏡。鏡だとコツンとやれば、簡単にひび割れるもろい代物。鏡を何枚重ねても、岩になる気づかいはないし、途方に暮れもしようではないか。唯一の希望は、そういう動揺常ならぬ「ヨハネの子シモン」のために、「信仰がなくならぬよう、折っておいた」とおっしゃる主のご配慮である。

昔、利三郎先生からお聞きした忘れられぬお言葉が、「主が私達に持つてくださる信仰」であつた。今はこうだが、きつ

とこうなるといふ不動の信仰を、主が私達に持つてくださるから、私達はその通りになつていくといふ信頼だ。それならば、安心である。風に揺れる葦みたいな者ではあるが、主の信仰を頼みとして、主に守られ、主に育てられてゆくならば、大丈夫。花も咲き、実も結べるではないか。

### 三、到達点

神の愛とは何か、どういうことか、どこにあるか、と言えば、イエス様そのものが神の愛であるといふしかない。イエス様を見れば、神の愛が分かる。神の愛が手に取るように、そこに表れている。神の愛の結晶である。

神様がどういふことをなさる御方かは、つぶさにイエス様を以つて見せてくださった。この方を受け入れれば、神様を受け入れたことになる。神様のご愛が分かる者となる。したがつて、イエス様を拒めば、神様のご愛が自分の内に成就しない。「御心の天に成れるが如く、地に成らせ給え」という主の祈りが、無になる。

イエス様こそが、私にとって全ての全てとなつたら、人生のあるべき姿の完成、本分の全う、といふことになる。

「もはや、我、生くるにあらず、キリスト、わが内にありて生くるなり」の境地こそが人生の完成であり、到達点であり

るからだ。

### 四、ウエイト

サウル王に召し出されて、滅入っている王様を立ち直らせるために、琴をかき鳴らしながら自作の詩を歌うダビデ少年は、さしづめシンガーソングライターの走りだったのではあるまいか。この形はその後もずっと続いて、一生の内、何十篇の詩を作つたのか、本人も数え切れなかつたのだろう。「雀、百まで踊り忘れず」というが、良きにつけ、悪しきにつけ、すぐその事が詩にまとめ上げられて、得意の琴片手に謳う彼の姿が想像されるのである。人の百倍もの多事多難で浮き沈みの激しかった多忙生活の中で、よくもそんな事ができた、いや、そんな暇があつたものよと、ついつい感心してしまうのである。

サムエル記上下を読めば、彼の歩みは手に取るように分かる。分かりはするけれど、もうひとつ彼の内側まで立ち入つて、どんな心境だったか分りかねるモドカシサがないではない。そこへ行くと、彼の作つた詩には、赤裸々な心情が披歴されていて、こちらまで揺さぶられる直接さがあるのである。

言い過ぎかもしれぬが、彼の詩には彼の人生のエキスが詰

まっている。もしくは、その波乱万丈の人生は、詩に結晶昇華されるためであつた、とさえ思えぬでもない。

こんな事を言うとは、色眼鏡もいゝところかも知れないが、マタイ、マルコ、ルカによる福音書中のイエス様は、どことなく遠くから眺める感じがあるが、ヨハネによる福音書のイエス様は間近に見る印象がある。多分、前者は行為の記述の比重が多く、後者は言葉の比重が圧倒的に多いせいと思われる。行為は人柄を間接的に示すが、言葉は人柄を直接的に表わす、と言つてもよいかもしれない。

ベタニヤ村のマルタは、自分の想いを行為によつてイエス様に示そうとして、他の夾雑物(きょうざつぶつ…不純物)に足を取られてしまった。マリヤの方は、イエス様のお言葉を直接伺う方を選んだ。

言葉を額面どおり受け取るのは、常識を差し挟むより、こと、神様関係においては危険が少ない。間違ひもない。何より神様から良しとされる生き方である。常識や経験にものをお寄せたばかりに、命じよと言われたのに岩を叩いてしまったモーセの取り返しのかぬ轍もある。つくづく、神様のお言葉を割り引いてはいけないと思えるのである。

信ずるとは、丸ごと信じてこと。その点、幼児はお手本。だからこそ、幼児のように受け入れなければ、神の国に入れ

ない、と主はおっしゃつたわけだ。

老いては、子供に還る、とよく言われる。わがままを捨て、率直を纏うことに精一杯努めようと思う。主の助けとお導きによつて……。

## 五、水増し

聖書を読んでいて、所々でアレツと思わされることがある。たとえば、ヨハネによる福音書の最終章で、「今とつた魚を少し持つてきなさい」と言われて、ペテロが船へ戻つて網を引き揚げ、わざわざ取れた魚を勘定して一五三匹の漁獲だと確かめたところだ。それまでも、指示に従つて網を下ろしたところ、網一杯の魚が取れたということはあつたが、数えて漁獲数がいくらだったというのは、絶無である。この時に限つて、わざわざ手間暇をかけたのには、何か理由があつたのだろうか、ペテロさんの痛くもない腹を探つてみたくもなるというもの。

まず考えられるのは、イエス様が死を目前におっしゃつた預言、「みんなそれぞれ私を見捨てて、家に帰つてしまふだろう」。そのとおり、ペテロ達はガリラヤに戻つた。戻つたのはいいが、さてどうするかということになると、差し当たつて食うために手っ取り早く「昔取つた杵柄」の再利用だとばか



り、ペテロの主導で勝手知ったるテベリヤ湖に出向いたわけだ。一行の中には、「待て待て、甦られた主にお目にかかったうえで、ご指示に従うのが先だ」と待ったをかけた者は一人もいなかったと見える。付和雷同というか、そいつはいい、それがいいや、それで行こうと、一も二もなく賛成してぞろぞろペテロについて行き、網付きの舟に乗って、沖へ漕ぎ出し、この時間にはこの場所が取れる確率が高いと穴場巡りをして、一晩中励んだわけだが、案に相違して一匹も取れず、ガツクリ肩を落として朝を迎え、仕方ない、岸へ戻ろうと、ギツチラギツチラ岸辺指して五十間位の所まで来たとき、朝もやの岸辺に立つ一人の人から、「子たちよ、何か食べるもんはあるのかね」と訊ねられ、「漁獲零で、腹ぺこですよ」と答えたところ、「それじゃ、船の右の方へ網を下ろしてみなさい」と言われ、こうなったら「五十回が五一回でも大差ない。駄目元でやったらうぜ」と相談の結果、ご助言に従うことにして、エイヤツと網を入れてみた。疲れ切っていたから、入るだけ入れてみるという、取りあえずの形ばかりだったにもかかわらず、手応えは十分、どこにこれだけの魚の群がいたのかと怪しむばかりの網一杯の入りよう。重すぎて無理やり引つ張り上げたら、バリバリと裂けそうだから、水中に垂らしたままにするつきやない。あの人はいったい誰なんかな

と、一同そつちへ向き直るか直らない内に、ヨハネがペテロに「あれは主だ」と告げた。さすがに懐刀と言われただけあって、人影の匂いと雰囲気、パツと分かる。ちくしょう、又またライバルに先んじられたかと思う暇もなく、これは大変、こんな所を見られてしまつて、とその辺に置いてあつた着物をパツとひつかぶつて、ドボンと水中へ姿を隠してしまつた。

似たような事は、やつてはいけない事をやらかしてしまつた、あのアダム夫婦にもあつた。会わせる顔がないという心理である。

さはさりながら、漁夫が水と心中できるわけがない。仕方なく船にくつついて岸へと寄つて行き、みんなの後から主の許へ行く。

「今取れた魚を少し持つてきなさい」と言われたことをいふことに、いの一番に取つて返し、網を一人でソロソロ引き揚げ、後ろ向きで、丁寧に取れた大きな魚を数えている間、どう言い訳しようかなと、ついおつと考え、やつと気持ちの整理がついたところで数え終わり、皆の所へ戻り、何と一五三匹もありましたよと、言わずもがなのことを口にしたからこそ、後年ヨハネさんのお弟子さんの手で、その事を記録される羽目になつたのだらうと推察されるわけ。

この後、魚労のことはおくびにも出さず、グイグイとペテロに追い打ちをかけて行かれるイエス様のお手並みには、ペテロならずともグウの音も出ないほどで、とりわけ、小羊から成羊までの面倒を見るのに、右顧左眄(べん)無用なりとの仰せが格段に重い。

## 六、この一行

周知のことかもしれないが、バイブル中一番短い章節は、多分ヨハネ福音書十一章三五節だろう。邦訳では、「イエスは、涙を流された」。英訳では、「Jesus wept」の短い二語だけである。「主は泣いた」で、十分意を尽す。

ラザロの死体の置場所を尋ね、こちらへどうぞと言われ、すぐ、感極まって泣かれたのである。

この一事に、イエス様の人間性が端的に表れている。人間が死に対して持つ当然の感情を、主もまた同じように抱かれたことを、この一事は示す。

何の説明もないけれども、私達の一番苦しい問題も、主は分かってくださるし、悩みを分かち担ってくださると保証する一行なのだ。

この一行に接して、慰められた人は少くないのではないかと。察しの悪い見舞い人の中の心なきユダヤ人は、イエス様

にもできない事があるんだなどと、訳知り顔な事を口にしたが、いつの世にもいるこういう口さがない手合いには一切かわらず、主は御業を成し給うたのだ。

## 七、ためいき

腹式呼吸では、まず腹の底から息を吐き出すことから始めるのが常識。そうすると、自然に息が吸える。思わず吸ってしまうという現象が起こる。意識的に吐き出す方にウエイトを置くことが、うまくやれるコツとよく言われる。実際、その通りやってみると、その通りと納得がいく。

同じことは、聖書を読む際にも言える。まず、持てるものを吐き出して、空っぽになってから読む。つまり、神様から与えられたものを、すっかり神様の功しですと、感謝と共にお返しして、スツカラカンの無の心で読む。すると、聖書の行間から新しい光が射ってきて、啓発されること疑いなし。これは体験から来る再現性のあることだから、いわば信仰的科学事実と言ってもよい。「求めよ。さらば与えられん」と、「与えられれば、遙かに多くのものが与えられる」と、一見背反するルールを統合する止揚(発展的統合)の良い例が、あの富める青年にイエス様がおっしゃったお言葉であろうか。「持っているものをみな売り払って貧しい者に施した上で、

私に従って来なさい。」つまり、与えてスツカラカンになり、その自分をイエス様に捧げ切ると、命が与えられます、ということ。

新しい着想が閃く条件も似たようなもので、持てる知識を総動員して吐き尽し、空っぽの状態になっている時に、ふっと天来の閃きが来る、といったことを経験した人は少なくあるまい。みんなみんな主の功しとその誉を主の御名に帰し上げて賛美をする姿は、詩篇の特徴である。

全てのものは神より出で、神にあつて成り、神に帰する、と大賛美を捧げたパウロのローマ書の絶唱もまた、同じ心だろう。

預けられた僅かな手持ちの投資で、目の廻るような利潤多き報酬が返ってくるこの道が、狭くて細かいと形容されて、見出す人の少ないのは、慨嘆せずにはおれぬことではあるけれど……。

## 八、the BIBLE

世の中はすべて、聖書の照射である、とこの頃つくづく思うようになった。世の中の出来事、人の動き、人の心、皆聖書の中のあの事と一緒だと分かる。聖書に書いてない事は何も無い、と痛感するようになった。そればかりか、まだ起こ

っていないこれからの事も、詳細が書かれているのだ。

たったの旧新約合せて一七三五頁の、片手に軽く持てる一冊の本に、一切合切が網羅されているのだから、驚き入ったことである。

英国の誰だったか、知る人ぞ知るほどのエライ人が、絶海の孤島に限られた書物しか持参を許されないとしたら、バイブルとシェークスピアの長話は一寸しんどいし、聖書一冊あれば充分、必要にして十分だと身に沁みて納得されてくるのである。

何よりかにより、生きがいと希望と平安と悦びとを持って生き通すには、不可欠の拠り所を提供する書物（かけがえのない書物Ⅱビブレ）だ。

## 九 気がかり

後にも先にも、イエス様との接触で、その後は行方知れずとなった登場人物は多い。

たとえば、重病の僕を癒してもらった百卒長、十二年間の長血患いの女、十二歳の娘を甦らせてもらった会堂司、ひとり息子を復活させてもらったやもめ、など教え上げればきりが無い。十二弟子の中でさえ名前のみの登場で、實際何をしたらやら、全く不明に終わった者もいる。バルトロマイ、タダ

イ、熱心党のシモンなど、何だか数合わせのその他大勢に見えて仕方がない。

実際には、ペンテコステの聖霊降臨後に続く大迫害を契機に、各地方や異国に散らばって有力な働きをしたに違いない。けれど、福音書には取り上げられないで、遂に脚光を浴びずに仕舞だったわけだ。

一回きりでも脚光を浴び、イエス様とのやり取りのあった人達は、福音書と共に永遠の生命を持つ存在となった。一回どころか、何回も登場の榮譽に与ったベタニヤの三姉弟なんか、特別の存在といふべきか。

イエス様はこの人達のどこが気に入って、上京の度にはほとんど常宿みたいにお寄りになったのか。親もおらず、連れ合いいもいたようにはなく、三人だけで世帯を張っていると見ると、仲は良かったかもしれないが、淋しい一家という印象は拭えない。イエス様と知り合いになる以前の事も、イエス様がお亡くなりになった後の事も、この三人姉弟についての消息は全く不明である。

イエス様がお亡くなりになる直前、皆しての食事の最中に、高価なナルドの香油を持って来てイエス様の頭から注いだ女は、このベタニヤの妹娘のマリヤだった(ヨハネによる福音書十二・三)。彼女ならではの人柄だ。前もつての葬りの塗油を

してくれたのだと高く評価されて、福音の伝えられるところではどこでも取り上げられるだろうとおっしゃった。

イエス様のお言葉どおりに、誰か取り上げて讃える事実はあっているのだろうか。全霊を捧げた、この佳き人の事を。

## 信仰雑感(五)

首藤 正(前田)

### 一、自省

自慢じゃないが、私の車は前後傷だらけである。

いつつけたのか、覚えのあるものもあるが、バンパーは本体の保護用についているはずだから、よしとしなければならぬのだけれど、傷ひとつない人様の車を見ると、つい気が引けるのである。何だか、自分の性格をそこに見ることができるといふような気にもなる。何かにつけて、ぶつかったり、こすったり、それも分かってするものもあるが、無意識にやっしまう方が多いようで、なかなかうまくいかない。出て行かなければ無傷で済むのだけれど、それじゃ車同様、存在理由が

ない。

学校の教官や知り合いから、スピード出し過ぎを指摘されたことも何度かあるし、事実出し過ぎで、キップを切られたこと三度の身ではある。三度目の正直というから、決めつけられたも同然。走行中、家内からやんわりたしなめられたこと数知れず。その都度、前後もわきまえず、勝手に自分だけゆっくり走れるかと言いつ返して、反省の色を見せないでいる。

自分が傷ついているということは、人をも傷つけているしなのだが、人の痛みはなかなか分からない。人の疝氣(腹痛の事)は三年でも我慢できるわけだからであろう。何気なく言った言葉で家内が傷ついて、十数年も経ってから、あの時こういうことを言われたと蒸し返されて、全く身に覚えのないちぐはぐさに茫然となったこともある。

ダビデさんだったか、隠れた答から守ってください、救ってください、犯しませんようにという謙虚な祈りを捧げる詩を読んでのを見ると、同調したい気に誘われるのである。ことに年を取って来ると視力が落ちて、視界も狭くなるし、何でもないそこら辺を通り抜けるのにも、どうかするとぶっつけて、ア痛ツと擦り傷を拵え(こしらえ)かねない体たらく。心ない言葉の端っこで、周りの者を傷めつける頻度も殖えるようだ。自戒し過ぎなしと省みている。

## 二、弁証法的発展

イエス様がお相手になったのは、どこか弱みを抱え込んだ人達ばかりという印象だ。世間に対して自分は水準以上の人間だと肩肘張っている人種は、お呼びでないという感じがあつた。水準以下の者を見下げて、そういう手合いと同列に交わるのはおかしいと攻撃する人達に対して、「健康な者には医者はいらないが、病人には医者が必要なんだよ」と、ご自身を医者に例えて立場を明らかにされた。

この立場をはつきりさせた一つの例として、ヨハネ福音書四章に登場するサマリヤの女とのやり取りがある。この女は男を五度も取り替えた身持ちの芳しからぬ履歴の持ち主で、世間から白い目で見られて、肩身狭く生きてたであろうから、早朝から女性達に立ち混じって共同井戸から水汲みしづらいし、夜遅く、朝遅いふしだらの時差出勤というところで、人を憚って昼頃こそつと水汲みに来たに違いないのである。

誰もいないと思つて来たのに、一人の男がいたから、ギョツとしたわけだろう。見ると細身の一見痛々し気の中年男性、身なりからするとユダヤ人。ついぞ見かけぬヒトだから、一瞬棒立ちとなった。如何にもくたびれている様子。なのに足音を聞きつけてさつと顔を上げて女に向い、

「やあ、水を飲ませてくれまいか」という。  
えっ、まじ？このヒト……思わず言ってしまう。

「あなた、ユダヤ人でしょ。なのにどうして、サマリヤの女であるこの私に飲ませてくれなんておっしゃるのですか。それは、おかしいですよ」。

常識に反することを平気でするこのヒト、ちよっとおかしいんじゃないだろうか、内心思う。そういう自分だって、相当おかしいのを棚に上げて疑ったのである。

すると、その男が意外なことを言い出した。疑問には答えず、全く別なことを口にするものだから、何だか、更におかしくなっていくようだ。大体、イエス様のもって行き方は、いつもこうなんだから。

### 三、藁（わら）

ご多分に漏れず、めつきり固有名詞の度忘れがひどくなった。線が切れたり、繋がったりで、記憶細胞の接続状態がさこぶる怪しい。

緊急対策のひとつとして、最近試みていることがある。それは、回りくどくて我ながらじれったいが、じれったさに対するに、じれったさを以てするというホメオパチー（毒を以て毒を制するという医学用語）の一種ではある。つまり、例

えて言うと、映画監督の黒沢明の名前がどうしても思い出せないとき、五十音を順繰りに唱えて行くのである。

アイウエオ、カキクケコと、ゆっくり噛みしめていく。一回で駄目なら二回、二回で駄目なら三回までは試みる。ワイウエヲに次いで、濁音、反濁音、拗音まで手抜きせずさらう。運が良ければ、「ク」の所で引っかかる。

それから、クア、クイ、クエとやってみる。すると、クロでまた引っかかる。すると、よくしたもので、クロサワと芋蔓式に正解が出てくる。バンザイである。

三回巡ってもどうしても手掛かりが掴めないときは、一応諦めて、思い切って他の事に関心を移す。そうすると、そうこうしている内に、思いがけなく、パツと黒沢明が浮かぶ、こともある。勿論、ない事も大ありだが、このやり方を繰り返して習熟していく内、想起の頻度が次第に高まってくるのも事実。どうかすると、一回目で行き当たるようになる。焦って人に聞いてみたり、辞典の類に当たってみたりの手っ取り早い解決策に走ると、「免疫」力の回復にはならない。

自力更生というヤツで、気長に取り組むことを怠らなければ、努力は多分、報いられる可能性は高い。ただし、この方法は多忙だったり、短気だったりという場合には向かないこととは言うまでもない。暫定的対症療法的では、根治にはほど

遠く、いわばカンフル注射程度の効力しかあるまいけれど、溺れる者は藁をも掴む老いのあがきと、先刻承知しているつもり。

#### 四、たったのひとり

ベテスタ池周辺の回廊には大勢の病人、盲人、身体不自由者が横たわっていたが、イエス様が目をとめて癒してやったのは、たった一人だけだった。三八年の長患いの寝たきり男だけを名指して声掛けて治してやったのであるが、他の病人にそれと分からぬように、小声でやり取りしたに違いない。そうでなければ、我も我もと押し寄せてきて、とりつかれてしまい、収拾のつかぬことになるのは目に見えている。自分の名さえ告げずに、こっそりとその場を立ち去られたのでも分る。他の事例でも再三口止めして、知られぬようにされたことから、うなづけることである。

この男の場合でも、意に反して大事に発展し、パリサイ人達からますます敵視される巡り合わせとなった。正に痛し痒しの成り行きである。なまじ、憐れんでやったばかりに、恩をあだで返される羽目となった。

これをしも、イエス様は父の神の御業と見なし給うて、何ら意に介さぬのである。

#### 五、もしも

パンの奇跡のところ、アンデレが手持ちのパンと魚のたった一人分しかないのを報告したら、いきなり、みんなを草に座らせるよう命じられたイエス様のご意向を察しかねて、何のためにそうさせなされるのですかとはいも申し上げず、ただ言われるまま、五千人に向って列を作って腰を下ろすよう指図したし、言われた方も言われるまま指図に従った。その盲従振りに、何とまあ、この人達は素直なんだろうと呆れる思いがするのである。

イエス様の方も、これから手持ちのこのパンと魚を祝して、数を増やしてお前達に食わせてやるから、とは一言も予告めいたことをおっしゃらず、弟子や群衆が命令に従うのを待つておられたに違いない。

かりに、彼らが言うことを聞かずに、何のために無暗に並んで座らすのですかと、抗議めいたことを言っていたら、パンには絶対与かれなかったであろうことは、疑いない。

#### 六、歩きながら

散歩は着想の源泉である。必ず携帯するメモに書きつけておく。メモをしないと、決まって後で思い出せない。思いつ

きを当てにして歩くわけではないが、結果的に歩いている内に、ふっと目新しい着眼点が浮かぶから、散歩にはそういう利点があることは疑えない。

イエス様は人を避けて独り退いて、父の神と差して交わりの祈りの時を持たれるのを常とされた。まさか歩きながら祈られたわけではあるまい。ゲッセマネで見られたように膝まづくか、伏せてお祈りなされたに違いない。モーセはせいぜい腰かけて、両手を上げて祈ったことであろうか。

私は形にこだわらず、何かをしながら祈ることが多い。そのひとつが、散歩しながらの祈り。じっと座ったままより、頭も舌も滑らかに働くから、歳のせいかもしれないと解釈を加えて、歩きながらの方を選び勝ちなのである。山道だと、人目もないし、空気も快適だし。

## 七、対極

イスカリオテのユダは肉の末路の象徴、肉性は所詮こうならざるを得ぬことを、人の身を借りて具現化した。彼は地上の王国を夢見て、裏切られた。そして、「可愛さ余って、憎さ百倍」を地で行き、裏切りを敢行した。

他人事ではないのである。もし、霊に生きることを選ばず、肉に捉われて肉を優先するなら、ユダの運命は他人事ではな

い。ユダは否定の形の鑑であり、大きな大きな他山の石なのである。隅の頭石の対極に居座る肉性の石なのである。

彼は、木っ端微塵に砕けて、跡形もなくなるしかない旧きエルサレムの石である。「生まれない方が、彼自身のためによかった。」しかし、実際は生れたのであった。そして、行くべき道を行き、奈落へ落ちて、無に帰した。

対する天と地、霊と肉、見えるものと見えぬもの、永続するものと滅びるもの、十字架の向こう側とこちら側。

## 八、湯タンポ

これは、気の毒と思ったひとりの女性のことである。と言っても、今の人ではなく、三千年前の人のことだ。

三・一一大地震のちょうど一か月前、インフルエンザで高熱を発し、布団に毛布を重ねて寝ていても悪寒に襲われ、特に腰から下が氷のように温まらなく弱っていた。

それでも、夜はうつらうつら眠っていたところ、パツと目を覚ますと、目の前に広くて長い会堂が広がっていた。西洋のカトリック寺院の内部のようで、ずっと先まで椅子が並んでいた。全体が青白く、スタンドグラス越しの光に輝いているようなのだが、人っ子ひとりいないのである。目の前には寝室の造作があるはずなのに、全く見えなくて、会堂の内部



だけが良く見えるのである。しばらくして眠ったらしく、光景は消えた。

後日、たしか作家の遠藤周作の集めた臨死体験者の共通目撃談に、青白く光る光景があったというのを読むか聞くかして、似たような印象だったと思ひ当った。当時の感じとして、まさか自分が死にかけているとは全く思っていなかったし、肺炎を発していたのならともかく、そのような兆候は全然なかったから、偶然の一致であつたのだろうと解釈している。

それはともかく、下半身の冷え切っていて手が付けられないとき連想したのが、ダビデの事だつた。体が冷え切つて眠れないのを心配したお付きの家来達が、全国を隈なく尋ねて、シユナミ人アビシヤグという非常に美しい若い乙女を見つけ出して連れて来て、ダビデ王様の懐に付き添わせて温めさせたというが、早い話、湯タンポ代わりに供したわけである。

一代後のソロモンの時代、神殿建設の棟梁役を拝命したヒラムがヨルダンの低地で粘土を使って鑄た物に、柱頭の玉があつたくらいだから、湯タンポを鑄造するくらい造作ない技術が、当時としてはあつたのではないか。もし、ダビデの家来にそれくらいの才覚があつたら、工人に命じて湯タンポを造らせ、王にびっしりあてがうことを思いついたのではあるまいか。

もしそうしていたら、アビシヤグは湯タンポ代役を承ることを免れ、ソロモンの手で父王の妻扱いを受けて寡婦（未亡人）として過ごさずに済み、多分、家庭を持つて平凡ではあつても、一人の主婦としての人生を送れたのではあるまいか。なまじ超美人に生まれたばかりに、氣の毒な事になつたあと、高熱の頭でうわ言のように呟いたものである。

もつとも、後宮で侍女にかしづかれて、生活に追われることもなく、安穩に暮せたであろうから、よしとする考え方もなくはないが。

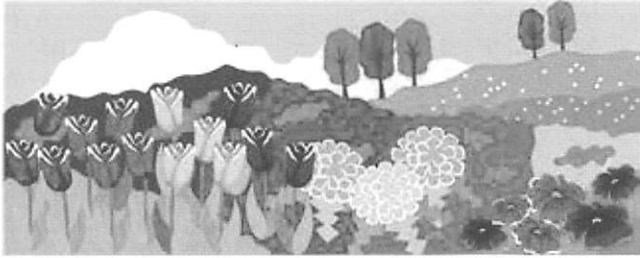
## 九、七十倍

イエス様と弟子やユダヤ人との間に交わされた問答は、すれ違いとちぐはぐの見本のようだ。次元が違うというか、かみ合わないこと夥（おびただ）しいもどかしさがある。

普通なら突き放して相手にしないところを、イエス様は諦めもせず、例え話まで持ち出して分かせようとなさる。教師の鑑のような方だ。

このパターンは、どうも肉の事をすぐ持ち出したがる自分と、何としても靈の事を分かせようとなさる神様との間に繰り広げられるやり取りそっくりで、ニコデモ先生の不様ぶりは、他人事ではない。

これまで何度、「バカ野郎、何べん言つて聞かしたら、分かるのか」と言われたか分らない。三度目の正直で実が成らなかつたら切り倒してしまうという裁きが当てはめられていたら、とつくの昔に庭から消えて跡形もなくなつていたら、よく思う。七度を七十倍する忍耐で扱われた気がしてならない。



## ロシア旅行記

正 野 眞 宏（前田）

私達は平成二三年六月六日から一週間、ロシアへの観光旅行に行かせてもらった。

ほかにも行ってみたい国は多くある中で、一般的にイメージが必ずしも良くないロシア、優先順位から言えば低位にあると思われるロシアに、何故行く気になつたのか。特別の目的があつたわけではない。毎月のように送られてくる旅行社の案内を見ている内に、ヨーロッパへ行くには遠くて体力に自信はないが、モスクワならやや近いからということ、ソビエト連邦体制崩壊後のロシアがどう変わったか見てみたいという思いもなくなつた。

そういうことで、行って見ようということになり、祈つてツアーを申し込んだ次第である。

ロシア渡航には、まだビザが必要である。国内の招待者がいないと、入れない。それほどの国交がないということか、それとも、まだ閉鎖的だということか。手続きはとても自分ではできないので、手数料を払つて、旅行社にお願いをする。入国手続きは今まで自分でやってきたので、今回もできるだ

ろうと思っていたが、飛行機内で配られた用紙を見ると、全部ロシア語で全く分からない。困っていたところ、横に座っていた若い女性が日本語で話しかけてくれた。アルメニアの方で、モスクワ経由で帰る途中だという。その方は大学で日本語を専攻し、実習で半年間日本に滞在した経験があり、今は旅行会社でツアーの仕事をしているとのこと。願ったり、叶ったり。入国手続きはすぐにできてしまった。

アルメニア共和国は我々には馴染みがなく、どこにあるかも知らない。早速、地図を取り出して教えてもらおうと、黒海とカスピ海の間であり、トルコと接し、「ノアの方舟」で有名なアララテ山の麓に位置する。アララテ山は、以前はアルメニアの領土だったが、トルコに取られた。だから今は行くことができないという。長い間ソ連に属していたが、一九九一年に独立したとのこと。政治的に多くの苦難を経験した国である。人口は三百万人。宗教はキリスト教が早くから国教で、ローマカトリックやギリシャ正教とは別のアルメニア使徒教会だと誇らしげに語る。

私もクリスチャンですと言うと、とても喜び、日本人のクリスチャンは初めてだという。主にある兄弟姉妹ということ、話は弾んだ。そこには国境はなかった。別れ際に、「千載一遇」という言葉を書いて渡し、載は数の単位で十の四七乗、

その千倍の天文学的な確率で出会うという意味です。今日、あなたと出会ったことは、正に神様の導きだったというほかありませんと言うと、とても喜んでくれた。握手をして別れたが、こういう出会いも、旅の楽しみの一つである。

主な訪問地は、モスクワ、セルエフ・ポサード、ウラジミール、スズダリ、サンクトペテルブルグで、いずれも世界遺産に登録された都市である。以下、主な都市での印象を記すことにする。

### ロシアの歴史

その前に、ロシアの歴史を簡単に述べてみたいと思う。ロシアは多民族国家であるが、主たる人種はスラブ人である。九世紀頃、東ヨーロッパに住んでいたスラブ人が辺境の北東ルーシ(これがロシアの語源)にモスクワ大公国を造り、ウラル、中央アジア、シベリヤまで広大な地域を呑み込んで形成された。その後、モンゴルの侵略を受けたり、周辺国との戦争があつたりしたが、一六一七年ロマノフ王朝が誕生する。十七世紀の終わりにピョートル大帝が即位すると、オスマン帝国やスウェーデン等との戦争に勝利し、強力な指導力のもと近代化を進め、「西欧への窓」を開くために、バルト海に通じるフィンランド湾に面した沼地の土地に、首都サンクトペ

テルブルグを建設した。この王宮と街が素晴らしい。彼以後はニコライ一世などが立つが、アレクサンドル二世の暗殺や日露戦争敗退など次第に衰退するとともに、農民などの不満が増大し、最終的にレーニンに率いられた革命によって、三〇四年続いたロマノフ王朝は遂に終焉し、一九一七年、世界初の社会主義国家「ソビエト連邦社会主義共和国」が誕生した。

以来七四年に亘るソ連共産党一党独裁による社会主義体制を維持してきたが、経済的行き詰まり等もあり、ソビエト連邦は一九九一年に崩壊し、今のロシア連邦となった。そして民主主義を取り入れ、自由経済体制となって今日に至っているが、その豊かな資源などによって高い経済成長を維持し、国民生活は向上する一方で貧富の格差が拡大し、内政的には多くの課題が残されている。因みに、通貨レートは、ルーブル三・五円である。

#### モスクワにて

六月六日午後七時(現地時間)、無事モスクワ空港に着いた。入国審査の時、ロシア語で何か言われたので、何を聞かれているのか分らず、「ジャパン、東京、九州、福岡」と適当に答えると、変な顔をされたが、判を押して通してくれた。

午前十時半に福岡空港を飛び立ち、韓国仁川空港で乗り継いでモスクワ入りしたが、実質飛行時間は十時間である。日本との時差は六時間。今のロシアはほぼ白夜状態で、日没は午後十一時半とのこと。朝は四時過ぎには明ける(白夜になると、一日中陽は沈まない)。その夜ホテルに着いて、床に付いたのは十二時を過ぎていたが、まだ外は明るかった。この日の一日は三十時間と言うことになるが、外が明るいために寝る気分にならない。体の方は深い眠りに入っている時間だが、頭は昼感覚というずれで、何とも変な気分である。

思ったより暖かい。昼は二度だったとのこと。木陰は涼しいが、気温的には日本とあまり変わらない。地球温暖化の影響かもしれない。

モスクワはロシアの首都で、人口は一千万人。十二世紀頃建設され、激動の歴史の舞台となった都市である。その中心であるクレムリンへ向かう。

クレムリンとは、日本の霞が関のように、政府機関が集中した場所と想像していたところ、それは要塞、城壁という意味で、地方へ行けば土塁のクレムリンもあるとのこと。中世期のヨーロッパでそうであったように、防衛上まず城壁を造り、その中に街を形成したわけである。

現在のクレムリン内の政府機関は大統領府と国会議事堂

があるだけで、他の機関はモスクワ市内にあるという。そのほかにはロマノフ王朝の宝物館や武器庫、それにロシア正教の聖堂があるぐらいで、そんなに広くはない。クレムリンの外側に「赤の広場」があつて、軍事パレードはここで行われる。ちようど建国記念行事の準備が行われていた。ここも思ったより広くはなく、中国の天安門広場の方が大きいと思つた。



### 赤の広場

(左がクレムリン、右は百貨店  
中央は歴史博物館)

モスクワや他都市を観光して驚いた事は、ロシア正教が国民の生活に根付いているということである。ソ連時代は神を否定する唯物論の下で、宗教はアヘンとして禁じられた歴史

がある。聞けば、革命によつて当時の聖職者の多くは肅清され、聖堂は破壊もしくは倉庫として使われていたという。私のイメージとしては、信教の自由が認められたとはいへ、まだそんなに回復することはないだろう、特に若い人は物質的な豊かさや自由を求め、宗教離れをしているのではないだろうか、そういう思いであつたが、見事に覆させられた。

観光として見て回つたのは、ソ連時代のものではなく、ほとんどロマノフ王朝時代の聖堂や修道院ばかりで、いささか辟易するぐらいであつたが、それらが全部世界遺産となつているのである。そこに集まつている人達に若い人が多く、しかも熱心に祈っている姿に接し、考えを改めさせられたわけである。側聞すれば、ソ連時代も水面下で教会活動は続き、特に貧しい人達を援助し支えたということである。ある修道院ではそういう人達のための食堂があつた。

私は思つた。どんな権力をもつてしても、人間の内に神が与えられた神を求める心を、抑えることはできないのだ。

ロシア正教の事を私は知らないが、見てみるとカトリックに似ている。そこでその歴史を調べると、初代教会の働きによつて各地に伝道が進められ、西暦三八〇年にローマの国教となり、十一世紀のローマ帝国の東西分裂と共にキリスト教会もローマカトリックとギリシヤ正教に分裂した。一方、ロ

シアを統一したウラジミール一世は、各地の様々な土着の宗教(多神教)を、一神教で統一する統治上の必要から、当時の東ローマ(ビザンチン帝国)のキリスト教(ギリシャ正教)を調べさせたところ、そのすばらしさに感動し、これをロシア正教として国教にしたことに始まる。各地に教会が立てられ、半ば強制的に改宗させられ、以来、これが国家の精神的支柱、ロシアの文化を形成するに至った。カトリックに似ているというのは、こういう歴史からきているわけである。

ロシア正教の教会堂の特徴として、金で覆われた「ネギ坊主」形の尖塔があるが、それは火焰を現わし、教会内の聖霊の活躍を象徴しているとのことである。また、教会内には金箔で縁取られたイコンが祭壇に掲げられ、あたかもご神体が如く拜まれている事に、疑問を持っていたが、これは平板にキリストや聖母マリヤ、聖者達の像を描いた聖像画のことで、イコンは地上と天国の間の窓であり、神の国を映す鏡に等しく、敬虔な信者はイコンを通して神の国を覗くことができると考えたとのことである。

しかし、聖書のどこにもそんな事は記されておらず、それは聖霊によらなければならぬはずだと、反発したくなる。



赤の広場にある聖ワシリイ大聖堂。

イワン雷帝がカザン・ハーンとの戦いの勝利を記念して建設した

もう一つの疑問があった。カトリックでもそうであるが、聖画やイコンにしても、イエス様よりもマリヤさんの絵の方が多いということである。なぜ、マリヤさんなのか。それはカトリックも同じ事情であるが、ヨーロッパもロシアでも土着の宗教が多神教であり、しかも女神が多かったとのこと。それで受け入れやすいように聖母子像を打ち出したことに始まるという。それで多くの人に受け入れられ、宣教が進んだことはあるかもしれないが、聖書にない事をしてよいもの

だろうかと思う。当時は文字が読めない人が多く、絵や像という見える形で伝えるほかなかったことは分かるが、それが形式化、偶像化しているのではないか。ある教会で礼拝が行われたが、聖職者が信者の頭に十字架のようなものを当てるだけで、神の言葉を伝えるというものではなかった。

しかし、千年以上営々と続いている信仰を、しかも皆さん私達と同じ三位一体の神を真剣に求めておられ、神も許して導いておられる信仰を、聖書を少ししかじつただけの私ごときが、批判などしてよいだろうか。私の為すべきは、聖書を通して、また御霊の助けにより神の御旨を悟らせていただき、与えられた信仰を深めることではないかと思った。

翌日、バスでスズダリやウラジミールなどへ行つたが、いずれにもロシア正教の聖堂や修道院である。途中の町々で教会の尖塔が見える。教会の周りに街が形成されているようである。自分達の信仰を大事にし、子供達にそれを伝えている。そういう意味では羨ましいと思った。我々日本はどうか。経済的にはロシアよりも豊かかもしれないが、宗教を持たない。神を恐れない国は、指標のない船のようで危うい。今、日本に必要なのは、お金ではなく、神を敬う信仰であると思う。何時間走っても、山らしい山はない。見渡す限りに原野が広がる。その中を国道が、それこそ北九州から福岡までの距

離を一直線に続くのだ。北海道にもそういう所があるが、その比ではない。日本とはケタ違いの国土の広さを思わざるを得ない。こんなに広いのだから、北方領土ぐらい、返還してくれてもよいのでは、とちよつと思つた。道路わきには白樺が並木となつて植えられている。

サンクトペテルブルグにて

モスクワ空港から、飛行機で北へ一時間半の距離にあるサンクトペテルブルグへ向かう。サンクトペテルブルグは、ピョートル大帝が西欧との交流を深めるために建設した町で、「聖ペテロの町」という信仰的に命名されたが、共産軍の革命がここから起こり、ソ連時代は「レニングラード」、その後「ペテルグラード」に変わり、ロシアとなつて、また元のサンクトペテルブルグに戻つたといういきさつがある。

ここはピョートル大帝時代の首都で、計画的に街が造られ、街並みが揃つて実に美しい。人工の運河もあり、ロシアのベネチアと言われている由。観光船で運河をクルーズしたが、貴族の館がそのまま残り、当時をしのばせる。その中にトルストイが住んでいた館が水辺に建っていた。彼は有力な貴族だったのである。

現地のガイドさんは六十歳の男性で、優に二メートルはあ

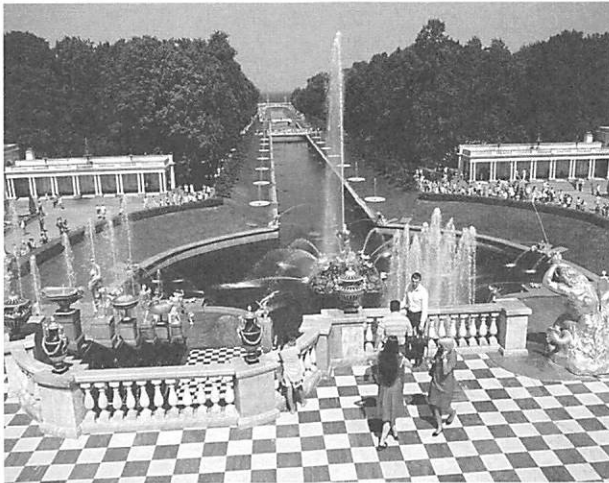
ると思える大男である。お陰で、少し離れてもすぐに分かる。大の日本通で、地理から歴史に至るまで、私以上に詳しい。日本を尊敬し、娘が大阪大学で教授をしているとのこと。時には冗談を言い、お陰で楽しい観光ができた。ロシアに対するイメージが少し変わった。

エカテリーナ宮殿へ向かう。ここはピョートル大帝の夏の宮殿と言われる所で、市内から少し離れたフィンランド湾に面した豪華な宮殿である。



エカテリーナ宮殿(上の庭園側)

それはパリのヴェルサイユ宮殿、ウィーンのシェーンブルグ宮殿にも比すべき、外観も内容も圧倒されるものである。特に庭が素晴らしく、全部を見るには三日かかるとのこと。下の庭園では百を超える噴水があり、しかも動力は一切使わず、山から数十キロ引いた水の高低差を使っているという。



下の庭園のメインの噴水  
向うにフィンランド湾が見える

これらを見てみると、ロシアという国の大きさを思わざるを得ない。これに比べれば、秀吉の大阪城も、贅を極めたという聚楽第も、まま事のように思える。部屋全体を琥珀で張



り詰めた「琥珀の間」や数百年を経ても色褪せない黄金の間などがあり、食堂だけでも数か所ある。ここで使われた調度品や衣装は、クレムリン内の宝物館に展示されていたが、どれもこれも豪華なものばかりである。

これらは民や外国に皇帝の権威を現わすために造ったのであるが、その費用は民から取り立てたものであり、一握りの人のために多くの人が泣かされた歴史が秘められているように思えた。これも第二次世界大戦の時に、ナチス軍から爆撃を受け、甚大な被害を受けたが、修復したのだという。

次の日、冬の宮殿に行く。冬の宮殿とは、エルミタージュ美術館である。なぜ夏と冬の宮殿があつて、春と秋の宮殿がないのかと、ガイドから質問されて誰も答えられなかったが、ロシアでは春と秋はそれぞれ二週間程度しかないからだと言明されて納得した。冬は零下十五度の厳しさである。

この冬の宮殿はフィンランド湾に注ぐネヴァ川に面して建てられ、夏の宮殿のような庭はない。それでも内部は絢爛豪華で、目を奪われる。明治時代、岩倉具視を团长とする使節団が皇帝と謁見した大広間があつた。中央の王座に皇帝が座り、両側には貴族達のはべり、中央を使節団が進んだという。この時、福沢諭吉が通訳として参加していたとは意外であつた。

この宮殿は、現在エルミタージュ美術館として使われているわけであるが、こんな贅沢な美術館はルーブル以外にはないのではないか。それに展示された名画の数々、ダビンチ、ミケランジェロ、レンブラント、モネ、マチス、ゴッホなど、これでも一部だとのことであるが、皇帝の趣味として買ひあさつたのだろう。お陰で、私達がこうして見ることができし、絵画や音楽などを愛する王や貴族達がいたから、画家や作曲家達も精を出すことができ、文化が発展してきたことを思うと、あなたがち無駄遣いとは言えないなと思つた。

残念ながら、絵心のない私には名画の良さが分からない。ダビンチの聖母子像の前には人ばかりであつたが、私には、「ア、そうか」と言うだけである。誰です、高い金を出してそこまで行つて、もつたいないと言っている人は。

私はむしろ聖書を題材にした絵の方に興味があつた。例えば、アブラハムがイザクを捧げようと刃物で刺そうとするところを、御使が止める場面や、放蕩息子が父親の所に帰つて来た時の様子を描いた絵は見事であつた。息子の落ちぶれた姿とそれを抱きかかえようとする父親の慈愛に満ちた表情、取り巻く人々の冷やかな顔や帰つてきた事を喜ぶ様々な人達が見事に描かれていた。

一日かけても、恐らく見終えることはできないだろう。私

達は三時間の駆け足観覧である。それでも、足が疲れて、じつくり見ることができなかつた。今度行かれる方は、足腰を鍛えて置くことをお勧めする。



エルミタージュ美術館(冬の宮殿)の正面

以上が、今回のロシア旅行の印象であるが、最後にロシア国民の生活について知りえた事を記したいと思う。先にも書いたように、ソ連体制が崩壊後、共産主義から自由主義へ転換し、国民生活は大きく変わった。ガイドさんの話では、自

由を得たことを大変喜んでいた。政治について批評しても、逮捕されることはない。議員は選挙で選び、自分達の意見が取り上げられるようになったが、今の議員は人気取りばかりで、理念がない、公務員はワイロが多いのだという。共産主義時代は平等の精神があり、アル中で働かない人も給料が同じだったが、今は働きて差が出るようになり、頑張れば豊かな生活ができるようになった。

しかし一方で、貧富の格差が出るようになり、治安もよくない。日本人は金持と思われ、スリに狙われやすい。平均月収は、都会で約十万円、地方ではその半分だろう。年金は二万円から三万円くらい。皆さんのように年金生活で海外旅行するなど、夢のまた夢ですという話に、改めて今の日本が恵まれている事を思わされた。平均寿命は、女性は七十歳だが、男性は五八歳位と低い。それはチェチェン紛争などの戦争やウオッカのアル中の影響があるとのことである。

地方ではまだまだだが、モスクワでは高層ビルが立ち並んでいる。国道では大型トラックがひっきりなしに走り、高級車も多い。経済発展は目に見えて感じ取ることができる。これまで国家主義で個人が抑え込まれていたが、これからはその力を発揮できる時代へ変わってきた。ロシアはこれからますます発展し、国民生活はさらに向上するだろうが、大事に

してもらいたいことは、今の国民に残っているロマノフ王朝時代の精神性、すなわち神を信じる信仰から離れないことである。そんな事を思いながら、日本に帰って来た。



冬の宮殿の大広間

詩「あしあと」より

金 生 栄 子（前田）

「ヤコブの家よ、

イスラエルの家の残ったすべての者よ、

生れ出た時から、わたしに負われ、

胎を出た時から、わたしに持ち運ばれた者よ、

わたしに聞け。

わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、

白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。

わたしは造ったゆえ、必ず負い、

持ち運び、かつ救う。」（イザヤ書四六・三〜四）

大いなる主の御名を崇めます。

すでに、数か月前のことになりますが、教会でのある日、正野兄から一枚の紙を受け取りました。そこには、「神われらと共に」というタイトルの詩が書かれてありました。正野兄いわく、「原田兄が、とても素晴らしい詩を見つけたので、できれば『ぶどうの木』に載せて、皆さんに読んでもらえれば、と持ってこられた」と。そして、「この詩を一目見て、これは、

栄子先生が以前、日曜学校の高校生クラスで、紹介してくださった詩と同じではないだろうか、と思った」ともおっしゃってくださいました。

私もその詩を見せていただき、これは確かに私の大好きな詩「あしあと」によく似ていると思えました。そのどちらも、人生で最も行き詰った時に、神様の愛の語りかけを聞き、慰めと励ましと希望が与えられる、という内容です。まずは、それらの詩をここに紹介したいと思います。

### ふたつの「あしあと」の詩

#### 神我らとともに（浜辺の足跡）

アデマール・デ・パロス（ブラジル）

夢を見た、クリスマスの夜。

浜辺を歩いていて、主と並んで。

砂の上に二人の足が、二人の足跡を残していった。

私のそれと、主のそれと。

ふと思った、夢のなかでのことだ。

この一足一足は、私の生涯の一日一日を示していると。立ち止まって、後ろを振り返った。

足跡はずっと遠く見えなくなるところまで続いている。ところが一つのこと気づいた。

ところどころ、二人の足跡でなく、

一人の足跡しかないのに。

私の生涯が走馬灯のように思い出された。

なんとという驚き、一人の足跡しかないところは、

生涯でいちばん暗かった日とびったり合う。

苦悶の日、

悪を望んだ日、

利己主義の日、

不機嫌の日、

試練の日、

やりきれない日、

自分にやりきれなくなった日、

そこで主のほうに向き直って、

あえて文句を言った。

「あなたは、日々私たちとともにいると約束された

ではありませんか。

なぜ約束を守ってくださいらなかったのか。

どうして、人生の危機にあった私を

一人で放っておかれたのか、

まさにあなたの存在が必要だったときに」。

ところが主は私に答えて言われた。

「友よ、砂の上に一人の足跡しか見えない日、

それは私がきみをおぶって歩いた日なのだよ」。

次に、私が初めて出会って二十年以上も経つ、詩「あしあと」を紹介したいと思います。

この詩はかつて、作者不詳の詩として知られていましたが、一九九六年に、この詩の原作者が書かれた本が出版されて以来、作者はカナダ人のマーガレット・F・パワーズさんというクリスチャンの方であることが判明しています。

あしあと

マーガレット・F・パワーズ

ある夜、わたしは夢を見た。

わたしは、主とともに、なぎさを歩いていった。

暗い夜空に、これまでのわたしの人生が映し出された。

どの光景にも、砂の上にふたりのあしあとが残されていた。

一つはわたしのあしあと、

もう一つは主のあしあとであった。

これまでの人生の最後の光景が映し出されたとき、わたしは、砂の上のあしあとに目を留めた。

そこには一つのあしあとしかなかった。

わたしの人生でいちばんつらく、悲しい時だった。

このことがいつもわたしの心を乱していたので、

わたしはその悩みについて主にお尋ねした。

「主よ。わたしがあなたに従うと決心したとき、

あなたは、すべての道において、わたしとともに歩み、

わたしと語り合ってくださいると約束されました。

それなのに、わたしの人生のいちばんつらい時、

ひとりのあしあとしかなかったのです。

いちばんあなたを必要としたときに、

あなたが、なぜ、わたしを捨てられたのか、

わたしにはわかりません」。

主は、ささやかれた。

「わたしの大切な子よ。

わたしは、あなたを愛している。

あなたを決して捨てたりはしない。

ましてや、苦しみや試みの時に。

あしあとがひとつだったとき、

わたしはあなたを背負って歩いていった」。

続いて、英語の原詩もここに紹介したいと思います。

## Footprints

Margaret Fishback Powers

One night I dreamed a dream,  
I was walking along the beach with my Lord.  
Across the dark sky flashed scenes from my life.  
For each scene,  
I noticed two sets of footprints in the sand,  
one belonging to me  
and one to my Lord.  
When the last scene of my life shot before me  
I looked back at the footprints in the sand.  
There was only one set of footprints.  
I realized that this was at the lowest  
and saddest times of my life.  
This always bothered me  
and I questioned the Lord  
about my dilemma.  
“Lord, you told me when I decided to follow You,

You would walk and talk with me all the way.  
But I'm aware that during the most troublesome  
times of my life there is only one set of footprints .  
I just don't understand why, when I needed You most,  
You leave me.”  
He whispered, “My precious child,  
I love you and will never leave you  
never, ever, during your trials and testings.  
When you saw only one set of footprints  
it was then that I carried you.”

### 詩「神われらと共に」との再会

奇しくも、「神われらと共に」の詩を知ったその直後、私は教会のある姉妹から、曾野綾子さんの「老いの才覚」という本をお借りしました。その方いわく、大変興味深い本なのでぜひ読んでいただきたい、ということでした。

曾野文学に初めて触れる私でしたが、高齢化が進んでいく中で、人は死ぬまで自立していくべき存在である、と指摘する、曾野さんの毅然とした口調に大変感銘を受け、いろいろと考えさせられました。

そして、読み進めていく中で、「神様の視点をもつ力」と

いう最後の章に、なんと、先程の「神われらと共に」の詩が全文紹介されてあるのを見て、大変驚きました。

曾野さんもこの詩が大好きで、他の著書にも載せておられることを後で知ったのですが、私も再びこの詩に出会い、ますます「あしあと」の詩との関連性について調べ、多くの方にこれらの詩を知っていただきたいと思いました。

こうして、はからずも、この「ぶどうの木」に私の大好きな詩を紹介するように導かれた次第です。

続けて、私がどうして「あしあと」の詩と出会ったかをお話したいと思います。

#### 詩「あしあと」との出会い

忘れもしない、一九八九年の八月、私は福島県の磐梯山の麓で行われた、日本イエス・キリスト教団青年全国大会に参加しました。この大会は、二年に一度、青年、神学生、教職など毎回三百人以上の参加者が集うもので、以前から私の兄弟が喜んで参加していました。私にとっては、中高生時代からの憧れの大会でしたから、特にこの最初の参加となる磐梯大会は、印象深いものでした。

奇しくも、この大会の特別講演の講師として招かれていたのが、教団の信徒リーダーとして活躍中の正野隆士兄（岡南

教会）でした。キリストの愛に基づく経営について、時にはユーモアを交えながらも、熱くご自身の証をしてくださいました。

当時、私は学生の身ながらも、クリスチャンとしての証を立てつつ、社会の第一線で活躍されておられる正野兄の講演に大変感動しました。そして、兄を見習って、どのような働きに就こうとも、与えられた務めを忠実に果たしながら、キリストの香りを放つ者となりたい、との願いが与えられました。

その六年後、不思議な神様の摂理により、私の長兄が岡南教会に牧師として遣わされた時に、正野兄との再会の時が与えられました。その折、ご自宅にもお邪魔させていただきました。としの姉から暖かいおもてなしをいただきました。正野兄の母君の証集「神は愛なり」の本もこの時にいただきました。数ヵ月後渡米する際にも持参した思い出があります。

さらに、その五年後、正野兄の母教会でご奉仕している主人との出会いが与えられました。このようにして結婚に導かれるとは、ゆめゆめ考えたこともなく、神様のお取り計らいの不思議さを思います。

さて、再び話を青年全国大会に戻しますが、この大会の主題講演者が、現在、日本イエス・キリスト教団の委員長を務

めておられる鎌野善三（よしみ）先生（池田中央教会牧師）でした。とにかくユーモアたっぷりで、会場を笑いに包みながらも、福音の核心をズバリと語られる鎌野先生のメッセーヂを通して、多くの参加者が大変恵まれると同時に、心探られ、新たな信仰決心へと導かれました。

私もまた、メッセーヂで取り上げられた、失敗の多いイエスさまの一番弟子であったペテロの姿を通して、「主イエスさまに喜ばれる真の弟子とならせてください」との祈りに導かれたことを鮮明に覚えています。

そのメッセーヂの最後が、次のような内容でした。

弟子の条件はただ一つ、「自分を捨て、自分の十字架を負って、主イエスさまに従うこと」である。ただし、主は、私たちに無理やり、たった一人で重い十字架を背負わせなさるお方ではない。「わたしのくびきを負いなさい」と招かれる主は、私たちの重荷も共に負ってくださいる愛の主でいらっしやる、と。

そして、最後の最後に、鎌野先生が涙ながらに話してくださいましたが、パワーズさんの詩「あしあと」でした。

当時は、作者不詳とされていた詩でしたが、鎌野先生もまた、非常に感動したというこの詩を紹介してくださいました。そして、人生で一番行き悩んでいるその時こそ、主はわたし

たちを背負ってくださいる時なのだ、だから、何も恐れることはない、全能の、しかも愛に満ちた主がわたしたちと共に歩んでくださる、何の恐れも不安も必要ない、ただひたすら、このお方に委ねて、導かれて、雄々しく大胆にお従いしていこう、という力強いメッセーヂで、締めくくられたのでした。

この日以来、私の心の中に、この「あしあと」の詩は深く刻みこまれ、折ある度に思い起こしては、冒頭の御言葉（イザヤ書四六・三〜四）と共に、愛なる主の語りかけに感謝したものです。

またその後、社会人となった頃には、キリスト教書店で、「あしあと」の額やしおり等が販売されるようになり、この詩を手元に置いてさらに親しむようになりました。

ただし、その頃は、原詩と微妙に異なる内容のものが出回っていた時期で、そのような似て非なるものの存在が、作者を悩ませ苦しませていたことなど、全く知る由もなかったのですが。

ふたつの詩の関連性について

さて、この二つの詩を見比べてみて、私の心に浮かんできたのは、一体どちらが先に書かれた詩なのか、調べてみたい、



という思いでした。

ネットで検索していくと、パロスさんの詩は明らかに、パワーズさんの詩の「パクリ」であろう、などと書かれてある記事をいくつか目にしました。しかし、本当にそうなのでしょいか？いろいろ調べてみると、パワーズさんの場合、邦訳されているご自身の証集があるため、詩「あしあと」が一九六四年に書かれたものであることが分かりました。

その後、引越した際に行方不明となつてしまつた荷物に入つていたはずの大切な詩が、いつの間にか、作者が全く知らない所で有名になっていました。そしてついに、一九八九年、詩が生まれてから二五年後に、滝壺に娘が落ちて大事故となつた最中に、この詩を通して、どれほど多くの人が慰めと励ましを受けてきたかを知ることになるうとは。作者の立場に立つなら、驚き慌てるのも無理はないことが分かるはずで。

パワーズさんは、続いて、その著書の中で、この詩がなぜか一人歩きしてしまい、作者としてのプライドはことごとく切り裂かれ、崩されてしまった実体験を赤裸々に告白しています。

いずれにせよ、パワーズさんこそが、詩「あしあと」の作者である事実は揺らぐことはありません。しかし、アデマー

ル・デ・パロスさんもまた、似たような信仰体験が与えられ、それらを詩に託されたのではないのでしょうか？

尚、調べ続けていくと、次のような見解に出会いました。パロスさんの詩は、曾野さんの著作に二度登場するが、そのどちらも引用元や翻訳者の記載がなされていない、つまり、邦訳は出版されていないし、ポルトガル語や英語などの外国語で書かれた詩集から、曾野さん自身が直接邦訳したものと考えてよい、という意見がありました。

確かに、「アデマー・ル・デ・パロス」の名で邦訳本が見当たらないので、この意見は恐らく当たっているのだらうと思います。ただし、「パクリ」というよりは、同じようなインスピレーションが与えられた詩人が、似通つた内容の詩を記したのではないだろうか、という気がしてなりません。

おわりに

いずれにせよ、このふたつの詩が、世界中の多くの方たちに、永遠に変わることはない神様のご愛とご真実に目を向けさせるという、大切な役割を担っている事実は変わりません。

前田教会のぶどうの木文庫の中に、このマーガレット・F・パワーズさんの書かれた本、「あしあと」多くのの人々を感動させた詩の背後にある物語（太平洋放送協会、一九九六年）

が置いてありますので、ぜひお読みいただきたいと思います。  
そして、このふたつの詩に出会った方々もまた、私たちを  
持ち運んでくださるお方、造り主にして愛なる主にお出会い  
し、感謝と喜びをもって、このお方に委ねる信仰を持つこと  
ができますよう祈りつつ、筆を置きます。



— 追 録 —

全か無か

人間世界（常識世界）は無<sub>い</sub> 信仰世界は全  
闇<sub>い</sub> 光  
虚<sub>い</sub> 実とも言える

信仰世界を「虚」と思う人が多いが  
事実は逆、わたしの顔を見てください。  
命を拒みながら、  
いきようとともがく姿を見るのは悲しい！

伊 規 須 太 郎（戸畑）



2012年 1 月 1 日 福岡大濠公園教会



2012年 1 月 4 日 八幡前田教会

## 編集後記

「神はわれわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない。われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。」

(使徒行伝十七・二七～二八)

はじめに、今年も「ぶどうの木」を無事発行することが出来たことを心から主に感謝する。

37号を迎える今回も、それぞれに与えられた時に、主がどの様に関わってくださったのかを振り返る、まさに「証人」としての働きが多く寄せられた。

ひとりびとりに与えられた時、殊にこの年は、環境や体調に変化を覚えた方の多くあった一年であったように思う。しかしそのような中であって、否、そのような中であるからこそ一層、われわれは神を近く感じる事ができる。

どのような事情境遇の中にあっても、その全てを握りしめてくださる方の御支配の下に「生き、動き、存在している」ことを覚え、この方の「証人」としての働きを熱くされたいと願う。

今回、この尊い「証人」のご用にあたってくださったおひとりおひとりに、主が報いてくださるように。また、この書を読まれる全ての方に、主の祝福が豊かにあるようにとお祈りする。(望)

発行 二〇二二年三月

発行者 福岡市中央区鳥飼二丁目二一六

基督伝道隊 福岡大濠公園教会

基督伝道隊 八幡前田教会

牧師 榎本和義

発行所 基督伝道隊

福岡大濠公園教会

八幡前田教会

戸畑教会

印刷製本 北九州印刷株式会社